

世界遺産地域の麓の価値と利活用
～森と大川（住用川）^{ウーコ}の環境文化～
記録集

令和8年3月

国立大学法人 鹿児島大学鹿児島環境学研究会

本 編

- | | | |
|----|--|---|
| 1. | 世界遺産地域の麓の価値と利活用～森と大川（住用川）の環境文化～
「体験活動」プログラム | 1 |
| 2. | 世界遺産地域の麓の価値と利活用～森と大川（住用川）の環境文化～
「座談会」プログラム | 5 |

資 料

- | | | |
|----|---------------|----|
| 1. | 配布資料 | 34 |
| 2. | 付録 イベント打合せ議事録 | 49 |

世界遺産地域の麓の価値と利活用

ウーコ

～森と大川（住用川）の環境文化～

世界遺産地域に登録されている住用地区の森と大川（住用川）のつながりを
流域文化の体験や流域の生活史の共有を通して理解し、
「環境文化型国立公園」の新たな利活用の可能性を探る。

参加費
無料

2025年12月14日（日） 午前の部 9:30～12:00
午後の部 13:00～16:00

会 場：奄美市住用公民館 奄美市住用町西仲間65

プログラム

9:30 午前の部 先着20名 要事前申込【申込締切 12月11日】

10:00 環境文化の体験活動：

「地域の方々と一緒にカニ料理の **フヤフヤ汁** を作ってみよう！」

協力：西仲間石原老人クラブ

12:00

12:30 昼休憩 みんなでフヤフヤ汁を食べよう！

午前の部に参加していない方でも、
先着50名様にフヤフヤ汁を
お召し上がりいただけます！

13:00 午後の部 事前申込不要（午後の部のみのご参加も歓迎です）

司 会 中島 慶次 氏（鹿児島大学鹿児島環境学）

挨拶・祝 唄

情報提供：世界自然遺産、環境文化型国立公園の価値について

（奄美群島国立公園管理事務所、奄美市）

「環境文化」体験試行（午前の部フヤフヤ汁料理体験）の報告

講 演：「住用川流域の環境文化景観－流域環境の特徴と暮らしの様子」
高梨 修 氏（大和村教育委員会〈環境文化〉学芸員）

休憩

14:30 座 談 会：住用地区の森と大川における環境文化に関する座談会

16:00

司 会 小栗 有子 氏（鹿児島大学法文学部教授）

申込方法 申込締切 2025年12月11日（木）

Webでのお申し込み <https://forms.gle/dW619ZfdP4q3DAJu9>

メールでのお申込み kankyogaku@kuas.kagoshimau.ac.jp

①氏名、②メールアドレス、③電話番号をお送りください

【連絡先】

鹿児島大学研究協力課研究協力係 池田（鹿児島環境学）

TEL 099-285-3229（月～金 9時～16時）



※ご連絡いただいた個人情報は、
鹿児島大学鹿児島環境学研究会が
提供するサービスの円滑な提供お
よび運営のために利用し、第三者
に提供することはありません。

【主催】鹿児島大学鹿児島環境学研究会 【共催】環境省奄美群島国立公園管理事務所 【後援】奄美市

◎世界遺産地域の麓の価値と利活用～森と大川（住用川）の環境文化～「体験活動」

- ・ 日時：令和7年12月14日（日）9：30～12：00
- ・ 場所：奄美市住用公民館（奄美市住用町西仲間 65）
- ・ 題名：地域の方々と一緒にカニ料理のフヤフヤ汁を作ってみよう！
協力：西仲間石原老人クラブ
- ・ 主催：鹿児島大学鹿児島環境学研究会
- ・ 共催：環境省奄美群島国立公園管理事務所
- ・ 後援：奄美市

➤開催趣旨

世界遺産地域に登録されている住用地区の森と大川（住用川）^{ウーコ}のつながりを、流域文化の体験や流域の生活史の共有を通して理解し、「環境文化型国立公園」の新たな利活用の可能性を探る。

【プログラム】

- 開会あいさつ 鹿児島大学鹿児島環境学 中島慶次
- 調理前の解説 西仲間石原老人クラブ 和田美智子
- フヤフヤ汁調理
- 参加者による試食

【開会のあいさつ】



【調理前の解説】



【フヤフヤ汁調理様子】





【参加者全員試食の様子】



【集合写真】



◎世界遺産地域の麓の価値と利活用～森と大川（住用川）の環境文化～「座談会」

- ・ 日時：令和7年12月14日（日）13：00～16：00
- ・ 場所：奄美市住用公民館（奄美市住用町西仲間 65）
- ・ 主催：鹿児島大学鹿児島環境学研究会
- ・ 共催：環境省奄美群島国立公園管理事務所
- ・ 後援：奄美市

【プログラム】

- 司会 鹿児島大学鹿児島環境学 中島 慶次
- 挨拶 奄美群島国立公園管理事務所所長 広野 行男
- 祝唄 茂木 幸生、 嘉川 敏子（合手）
- 情報提供 奄美群島国立公園管理事務所国立公園管理官 興津 絵美
奄美市住用総合支所主査 岡 翔太
西仲間石原老人クラブ 和田 美智子
- 講演 大和村教育委員会<環境文化>学芸員 高梨 修
「住用川流域の環境文化景観-流域環境の特徴と暮らしの様子」
- 座談会 司会 鹿児島大学法文学部教授 小栗 有子
 ^{ウーコ}
 住用地区の森と大川における環境文化に関する座談会
 パネリスト：茂木 幸生、和田 美智子、久 伸博
 高梨 修、島崎 仁志、師玉 当太、
 広野 行男

【開会】

鹿児島大学鹿児島環境学研究会 中島慶次（司会）

鹿児島環境学研究会の中島と申します。本日は司会を務めます。よろしくお願いいたします。本日は「世界遺産地域の麓の価値と利活用、森とウーコの環境文化」にお集まりいただきまして、ありがとうございます。

皆さん、フヤフヤ汁は食べられましたでしょうか。私も初めて食べましたけれども、とてもおいしいと思って食べました。少しまだ残っていると思いますので、もしよろしければ、休憩時間に召し上がっていただきたいと思います。

では、始めたいと思いますので、よろしくお願いします。



【主催者挨拶 鹿児島大学理事 橋口照人】

-----まず、今回の主催者であります鹿児島大学から、橋口理事が来る予定でしたが、急遽来られなくなりましたので、映像でご挨拶をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

鹿児島大学橋口理事（映像出演）

皆さん、こんにちは。鹿児島大学の橋口です。本日は鹿児島大学環境学研究会が主催する「世界遺産地域の麓の価値と利活用、森とウーコの環境文化」にお集まりいただきまして、誠にありがとうございます。鹿児島大学は、南九州から世界に羽ばたくグローバル教育研究拠点としての価値を高めることを目指しています。本学は奄美群島を含む南九州から南西諸島域の南北 600 キロに及ぶ県土を有する地に位置しており、南九州南西諸島域を中心とした課題の解決に教育と研究の両面から取り組んでおります。本学は 2015 年に旧名瀬市に国際島嶼教育研究センター奄美分室を開設、2023 年には同施設を鹿児島大学奄美群島拠点として拡充し、次年度以降は奄美サテライトキャンパス、TSUMUGU AMAMI キャンパスを整備する構想を進めており、これまで以上に奄美群島での活動に力を入れていきたいと考えています。皆さん、ご存じのように、2021 年にここ奄美大島を含めた南西諸島の 4 島が世界自然遺産として登録されました。鹿児島大学では世界自然遺産の登録に先立ち、地元自治体や環境省と協力して、奄美群島国立公園の指定に向けて、住用地区でも環境文化の共同調査や、若い世代や地域の皆さまと学習の交流の機会をつくってまいりました。これらの取り組みが国立公園の指定や世界自然遺産の登録の一助になったものと考えています。また、鹿児島大学では、本日の座談会の司会を担当されます小栗教授が中心となり、奄美群島の地域特性を生かした島の発展のための人材育成を目的に環境文化協力プログラムを奄美群島の一般社会人や行政職員などを対象に開催してきています。本日の座談会の副題を「森とウーコの環境文化」としています。皆さんの住む住用川と、役勝川の入りは、奄美大島の中でも標高の高い世界遺産地域の山と森に二つの大きな川を通じて深くつながった独自の環境文化を持った地域だと主張しています。IUCN は一昨年出した世界遺産戦略の中で、自然遺産であっても、その自然を守り活用してきた地域の伝統的な空間が世界遺産の保全のためには重要であることを挙げています。世界遺産の山と森に川でつながったこの地域の独特の環境文化はまさに



人のつながりと自然とのつながりを示す素晴らしい事例です。その環境文化をどのように引き継ぎ、そして、利活用するかは、大変重要なテーマだと考えています。最後になりましたが、本座談会の開催にあたり、資金協力をいただきました環境省沖縄奄美自然環境事務所、後援をいただきました奄美市、そして午前中にフヤフヤ汁の料理体験の場を提供していただいた西仲間石原老人クラブの皆さん、そして、ご登壇いただく皆さま方の多大なご協力をいただきましたことを感謝いたします。本座談会が皆様にとって実りあるものとなることを願いまして、私の挨拶とさせていただきます。-----ありがとうございました。

【共催者挨拶 奄美群島国立公園管理事務所 所長 広野行男】

引き続きまして、共催となります環境省奄美群島国立公園事務所の広野所長よりご挨拶申し上げます。

奄美群島国立公園管理事務所 所長 広野行男

皆さん、こんにちは。環境省奄美群島国立公園管理事務所の広野と申します。今回の座談会を共催しています。本日、お忙しい中、ご参加いただきまして、ありがとうございます。また、普段から国立公園の保護管理についてさまざまなご支援をいただいていますことも、重ねて御礼申し上げます。どうもありがとうございます。先ほど理事長からも少し話がありましたけれども、この奄美群島国立公園は、まもなく指定から9年になりますが、2017年に指定をされまして、それから約4年後、2021年に、世界遺産登録に至ったという経過があります。もともと奄美群島は、奄美群島国立公園でありましたけれども、世界遺産登録を目指すにあたっては、遺産地域となるコアなところ、特に森林部分を大幅に拡張する形で国立公園に格上げをしたということになります。この国立公園はもちろん世界遺産の最も重要な価値である生物多様性を保全する重要なエリアということは間違いありませんけれども、一方で、その国立公園のもう一つのテーマが、まさに今日この座談会のテーマになっています、いわゆる環境文化型の国立公園ということで指定をされたということです。環境文化とは、というところは、今日、お手元にお配りしている資料にも計画書の抜粋を挙げていますけれども、われわれも、普段業務を行いながら環境文化型国立公園をどのように具体的に現場として理解をして、それをどううまくつなげて発信していけるのかということ、日々非常に悩んでいるところでした。今回はこのような企画をいただきましたので、今日はこの副題にもありますように、大川の存在を中心として、まさに遺産登録がなされた森林域のコアなところから、マングローブ林が広がる下流域までを一つの流域一帯のエリアとして捉えて、その中で、今までこの地域に住まわれている方が、どのような関わりを持って川の恵みなどを享受されてきたのか、それが今どういう形で残って、これから先どのように継承していけるのかということ、ぜひ考えていきたいと思います。国立公園としましては、やはり国を代表する自然公園ということですので、国内外からたくさんの方がいらっやあって、それぞれにやはり国立公園の魅力を味わって体験していただくということは一方で重要だと考えていますので、今日、さまざまな興味深いお話を伺って、それぞれの話を何とか一つにつなげてまとまりを持った魅力として、今後環境省としても発信を考えてまいりたいと思いますので、よろしくお願いします。簡単ではありますが、私からのご挨拶といたします。本日はどうぞよろしくお願い致します。



【祝唄 茂木幸生、嘉川敏子（合の手）】

---続きまして、茂木さんと、相方として瀬戸内町嘉川敏子さんによる、祝い唄のご披露をお願いしたいと思います。茂木さんは今年奄美民謡大賞で最優秀賞を受賞されました。よろしくお願

ます。

茂木幸生、嘉川敏子（合の手）

茂木と申しますよろしくお願いします。島唄という中に「朝花」という唄があります。唄は朝花からといいます。朝花そして祝い唄の「長朝花」に続きたいと思います

-----素晴らしいですね。ありがとうございました。



【情報提供 奄美群島国立公園管理事務所管理官 興津絵美】

それでは、環境省から環境文化国立公園について情報提供していただきたいと思います。興津さん、よろしくお願いします。

奄美群島国立公園管理事務所管理官 興津絵美

皆さん、こんにちは。環境省奄美群島国立公園管理事務所の興津です。普段は住用の奄美大島世界遺産センターに勤務しています。今日は、奄美群島国立公園と、世界自然遺産について、簡単に10分ほどでお伝えします。

先ほどからたびたび話には出ていますが、奄美群島の島々は、奄美群島国立公園に指定されています。平成29年3月に指定されて、来年度令和9年3月に、ちょうど10周年を迎えることになります。



国立公園は、どんなものか想像しにくい方もいるかもしれませんが、スライドに国立公園の区域を表示しています。この色に囲まれた部分は国立公園の区域です。このスライドで住用地域を拡大しています。住用にも国立公園の区域に含まれているところがたくさんありまして、西仲間とか周辺の集落の人が住んでいるところも水色で囲まれた国立公園の区域です。

国立公園とは何かと言いますと、日本の優れた自然の風景地を保護して、またそれを利用していくことで、人々の学びとか癒しになったり、もしくは生物多様性の確保につなげていくというものです。この優れた風景地という言葉を知ると、自然の景色とか、生き物とか、そういったものを想像すると思いますが、奄美群島国立公園は少し違うところがあります。ここに書いてある特徴として、まず、豊かで多様な自然環境が群島それぞれの島にあること、そして、固有で希少な動植物がからなる生態系があること、最後に、人と自然との関わりから生まれた文化景観、これを私たちは環境文化と呼んでいますけれども、そういった環境文化がこの国立公園の特徴として位置づけられています。

国立公園をどういうふうに管理していくかを定めた管理運営計画書というのがあります。その一部を抜粋したものを、皆さんの手元にお配りしています。こちらに記載の「環境文化とは」というところで、「自然と人の関わりの中で形成された風景や風土を、この管理計画では環境文化と呼ぶことにします」と記載されています。また、裏面を見ていただくと、裏面の地図に、国立公園にこういった景観があるのか、こういった特徴があるのかが、地図で示されていて、山の景観や海岸の景観の区域が囲まれていまして、その中に島集落景観というのがあります。12～13個、シマ景観がありまして、そのうちの4つは住用の集落です。西仲間、石原、中役勝、上役勝が、国立公園を代表するようなシマの景観があるとして、管理運営計画書に記載されています。こうした私たちの暮らしや伝統文化が、日本の優れた風景地として認められて国立公園の中で位置づけられていることが分かります。

世界自然遺産についても、簡単にご紹介します。こちらもお存じの方は多いでしょうけれども、

奄美大島、徳之島、沖縄島北部のやんばる地域と西表島が 2021 年、令和 3 年に世界自然遺産に登録されています。登録された理由として、日本の中でも生物多様性が非常に高い、そして絶滅危惧種や固有種、独特な進化を遂げた種が多いというのが登録の理由となっています。奄美大島や徳之島などを自然遺産として登録することは、生物多様性の保全上非常に重要であるということで、その価値が世界的に認められたものです。世界自然遺産も、実は島全体が世界自然遺産になっているわけではなく、中央や南部の森や山を中心に世界遺産の地域として指定されています。濃い緑色が遺産地域で、薄い緑の部分は緩衝地帯と言って、人の暮らしと遺産地域の間に設定するもので、遺産地域を守るために緩衝地帯もそこに準じて守りましょうというものになっています。

住用の周辺はどうなっているかと言いますと、人の暮らしているところの近く、すぐ後ろの山などに緩衝地帯が広がっています。それよりもさらに奥深い山、もしくは住用川の上流のほうに行くと、遺産地域につながっていきます。こういったことで、住用の地域は、文化とか伝統とかの価値が国立公園として認められていますし、こういった自然環境、生物多様性というのも世界的に価値が認められたエリアになっています。今日の後半の座談会では、こうした住用にあらためてどういった価値があるかということ、みんなで話し合っ、それをどう今後活用していけるのか、持続的に活用していけるのかを話し合う予定です。ぜひ座談会も楽しみにしていただきたいと思います。私の話は以上です。ありがとうございました。

-----興津さん、ありがとうございました。

【情報提供 奄美市住用総合支所主査 岡翔太】

引き続きまして、住用支所の岡さまから、住用版地域創生戦略とその取り組みの最新情報についてご提供いただきます。よろしくお願いします。

奄美市住用総合支所主査 岡翔太

ウガミンショーラ。こんにちは。市役所住用総合支所の岡と申します。所長の藤江が所用で間に合わないかもしれないということで、代わりに私が地域創生戦略についてお話をいたします。

早速余談ですけれども、午前中に私もフヤフヤづくりに参加しまして、大変おいしくいただきました。お話を聞くと、フヤフヤはもともと三献の三の膳ということで、私は母方が龍郷の戸口ですけれども、戸口は、かしわ汁にシブリ（冬瓜）とかするものですから、同じ島なのにだいぶ違うということを実感したところでした。



さて、地域創生戦略です。これは今年策定されたものですが、前提として、昨年、奄美市総合計画「未来の奄美市づくり計画」という、今後 15 年間奄美市が目指すべき方向性を示した計画が先に策定をされています。その計画に基づいて、より具体的に住用地区の活性化を目指すために策定されたのが住用版地域創生戦略です。策定にあたりましては、住用の地域協議会から市に提出されました報告書で示された、このオレンジ色で書かれている三つの方針、自然を活用した稼ぐまちづくり、災害に強い防災まちづくり、定住振興を見据えたまちづくり、をもとに、また囑託委員の方々ですとか、地域協議会の皆さま、それから産官学金労言の皆さまの幅広い意見を取り入れながら地域創生戦略の審議会において、検討が行われたものです。目的につきましては、先ほどお話ししたとおり、具体的に住用地区の活性化を目指すものとなっています。戦略の対象期間は、令和 7 年度から 10 年間で、その間はフォローアップ、要するに進捗状況の点検・確認を行いながら、3 年ごとに見直し、計画・実行・評価・改善を行うこととしています。

情報提供になりますけれども、戦略を策定する際に、住用町の人口の推移も挙げています。昭和

30 年までさかのぼりますと、4,133 名が住用地区にいらっしゃいました。そこから令和 5 年には 1,155 名にまで減少している現状があります。

戦略自体は大きく分けて、三つの大きな目標と、目標の下に取り組みの方向性が位置づけられています。先ほど申し上げた大きな目標を一つずつ見ていきます。

一つ目は自然を活用した稼ぐまちづくりです。方向性としては、記載のとおりです。具体的にどういった取り組みをしていくかと言いますと、地場製品の加工製造の促進、休耕地の活用、集落ガイドの育成事業、モニュメントと案内板の設置事業、集落史の作成、この大きく 5 本の取り組みを取り上げています。三つある目標の中で、この一つ目は稼ぐ目標と捉えていただければと思います。

二つ目の目標は、災害に強い防災まちづくりです。この中にも経験した方は多くいらっしゃると思いますけれども、平成 22 年に奄美豪雨がありました。それを教訓にしまして、災害に強い防災まちづくりを目指すということで、取り組みの方向性はこちらに掲げている 8 つです。三つの目標の中で、二つ目については住民の皆さんを守っている目標と捉えていただきたいと思います。

三つ目の目標は、定住振興を見据えたまちづくりです。現状は先ほど申し上げたとおり、人口が減っているということで、課題についてもこちらに記載のとおりです。大きく分けて 6 つの取り組みを挙げていまして、空き家対策、民泊の開設支援、認定こども園の開園、子育て支援、学校の再編、小水力発電事業導入検討です。人口を増やすための方策と言いますか、子育てなどの取り組みを挙げています。

三つの目標がそれぞれ連携していくことで、地域の活性化を目指しています。この計画もそうですが、あくまでも主役は町民の皆さまです。町民の皆さんと一緒に、「人と自然と文化」が息づく「住んでよし・訪ねてよし」のまちづくりを目指していくように、またご協力をお願いしたいと思います。

駆け足になってしまいましたが、私からの情報提供は以上となります。ありがとうございました。

-----ありがとうございます。

【情報提供 西仲間石原老人クラブ 和田美智子】

引き続きまして、今日の午前の部での環境文化体験試行としてフヤフヤ汁の料理体験をしましたけれども、そのご報告を、西仲間石原老人クラブの和田様からしていただきます。よろしくお願いします。

西仲間石原老人クラブ 和田美智子

皆さんこんにちは。西仲間集落の和田美智子です。よろしくお願いをします。先ほどもありました、午前中に西仲間石原老人クラブの役員の方々が中心になって、フヤフヤ汁を作りました。今日、お召し上がりになりましたでしょうか。親子体験、そしてIターンとかUターンの方々も交えて体験をいたしました。

奄美にはお正月に三献というのがありまして、一の膳が餅、二の膳が刺身、三の膳は各地域によって地域の特産を中心にして出します。特に西仲間の場合には、住用川がありまして、その住用川で採れたカニをフヤフヤというものにしまして、三の膳に出します。瀬戸内町の場合は、イェーズムンと言って、塩漬けにした魚を三の膳に出したり、イノシシの採れるところはイノシシ汁にしたり、トビンニャがあったり、地域によって三の膳がそれぞれ違います。

今年はこの老人クラブの方々が受けまして、これが採れましたカニです。先ほどの島唄で「がん



よ一、がんよ一、すみようのがんよ一」という、この「がん」（がカニの意味）です。嚙子にあります。これは、役員の人たちで、カニの甲羅を剥がしたりする準備作業です。これは、ミキサーでは刃こぼれをするので、臼で突いて柔らかくしているところです。今、説明をした三献の話（をしている様子の写真）です。体験をする方々を交えて話をしたところです。これが、役員の方で、今日お召し上がりになりましたフヤフヤを作っている風景です。これが、殻を絞ってでき上がった汁です。スープになる前のカニの汁です。これは、今、右のほうがかいていっているところです。これはでき上がったものをみんなで試食しているところです。これも同じです。これが集合写真です。今回使ったカニは 100 匹でした。この大量のカニをどうやって昨日まで保存したかといいますと、こちらに区長さんもいらっしゃいますが、区長さんも一緒になってカニを採り、そのまま置いておくと瘦せてフヤフヤにならないので、エサをやりました。カニの餌には何をあげたでしょうか。うどんでしたり、カボチャを刻んで入れておくと、本当にぱくぱく食べます。カニの卵を島ではシキと言いますけれども、シキがたくさん入った肥えたカニになっていまして、今年は温かいので、メスガニがまだ下りてきていません。今日いただいたのはオスガニが多くて、メスガニが少なかったです。島の年配の人たちはメス 5 匹にオス 3 匹を入れると、女性のほうが強いから、きれいな塊ができると冗談半分に言います。やはりメスガニとオスガニを混ぜて作ったほうがきれいな塊ができると言われています。

今日はいかがだったでしょうか。カニのフヤフヤを初めていただいた方はいらっしゃいますか。お味はどうでしたか。ありがとうございます。老人クラブの人たちが、だんだん子供たちのこういうフヤフヤということをお正月にいただく機会がなくなってきているということで、今後、老人クラブで、伝承活動を交えながら、若い方々、あるいは子供さんに伝えていこうという活動をしています。よろしくお願いします。ありがとうございました。

-----和田さん、どうもありがとうございました。

【講演 大和村教育委員会〈環境文化〉学芸員 高梨修】

引き続きまして、大和村教育委員会の環境文化学芸員でいらっしゃいます高梨修氏に、「住用川流域の環境文化景観―流域環境の特徴と暮らしの様子」についてお話しいただきます。高梨さん、よろしくお願いします。

大和村教育委員会〈環境文化〉学芸員 高梨修

皆さん、こんにちは。ただ今、ご紹介いただきました高梨です。この度、このような勉強の機会を与えていただきました鹿児島大学環境学研究会の先生方、環境省の皆さま方、御礼申し上げます。住用町の皆さま、ご無沙汰しております。奄美博物館時代に大変お世話になって、本当にありがとうございました。今日は当時を思い出しながら、住用川の環境文化について、復習してきました。このあとの座談会を盛り上げられるような話をしたいと思います。よろしくお願いします。大量にスライドを作り過ぎてしまいましたので、駆け足で行きたいと思います。本日はお話しする内容です。1～5 までありますけれども、盛沢山になりすぎていまして、全部お話しするのは、無理かもしれません。住用川に関する 2 と 3 をメインに進めていきたいと思います。



本題に入っていく前に、環境文化とは何かという話を押さえておきたいと思います。2017 年 3 月 7 日に奄美群島国立公園に指定されたときに、環境文化型国立公園が日本で初めてできました。環境文化の概念については、「自然と人の共生」と表現されてしまうことが多いのですが、それだけ

では、どこでも自然と人の共生はあるわけですから、なぜ奄美で環境文化が使われたのかということがよく分かりません。そこはこの後の座談会の際にもう少し環境省の皆さんからも説明がほしいと思いますけれども、環境省の資料を探しましたら、皆さんのお手元にもあるこのようなものが出てきます。国立公園の指定から 10 年近くさかのぼった頃に、奄美地域の自然資源の保全活用に関する検討会がありました。そこで既に環境文化型国立公園が議論されていて、その定義も出てきます。黄色の部分です。読み上げませんが、非常に重要な部分には下線を引いていますので、ぜひお目通しください。非常に重要な定義だと思っています。それで、この検討会の議事録がありまして、委員のこんな発言がありました。勝手に 1、2、3 と番号を付けましたので、今日は会場の皆さんがこの辺りのことを持ち帰れるような機会になったらいいなと願いながら話します。

環境文化についてですけれども、環境という言葉が曲者です。日本では、環境省という役所があるせいか、環境という言葉を見ると、大抵の方が自然を連想されると思います。しかし、環境というのは、決して自然だけを指すわけではありません。周りにあるものを表す抽象的な概念です。これは、ドイツの心理学者のクルト・コフカが作った図です。環境には客観的環境と主観的環境があると言います。客観的環境とは地理的な環境で、主観的環境とは人の営みで行動的な環境だと、クルト・コフカは言っています。このコフカの環境論を参考にして、私は次の図のような整理をしています。環境には、「見える環境」と「見えない環境」があります。それらは自然的環境と歴史的環境と文化的環境からできています。先ほどの環境省の定義でも歴史的につくり上げられてきた自然と人間の関わりの過程と結果の総体と述べられていました。このあと登壇される鹿児島大学の小栗先生が担当されている鹿児島大学の奄美環境文化教育プログラムがありますけれども、これらの環境について、一番下の段で示しているような講義をやっています。人の営みの中で特に重要なのは、見える環境です。その見える環境の中でも、地形と居住地域が特に重要です。今日の住用川の話は、この見える環境の地形に関する話が一つポイントになります。

それから、環境文化の、今度は文化のほうも簡単に整理しておきます。表にまとめてありますが、これもお手元の資料で目を通してみてください。ここで確認しておきたいのは、環境文化というのは、民俗文化そのものではないということです。民俗文化というのは、伝承文化を指します。世界自然遺産の推薦書における環境文化に関わる記述は、ここが少し民俗文化寄りの記述に感じられます。その辺りの扱い方が曖昧な感じを受けました。環境文化は民俗文化も含むもっと広い生活文化、暮らしそのものということです。環境文化は今の生活文化を捉えるための概念と理解すべきだと思います。

座談会に登壇される、先ほど島唄も唄っていただいた茂木幸生さんは、この環境文化を、「その土地の暮らしの歴史」というふうに表示されましたが、まさしくそうだと思います。環境文化の大事な部分は民俗文化であることではなくて、人と環境の関わりの中で、どのように環境に適応して、何を資源利用しているのか、環境適応の戦略と資源利用の戦術、これが核心になります。これが環境文化の肝の部分です。環境適応と資源利用です。

さて、住用川の流域環境の特徴についてお話をしていきます。この図は私が作ったものです。南西諸島の世界自然遺産のある島と、奄美群島の島の高さと面積を棒グラフにしたものです。細かい説明は省略しますが、島の高さを見てください。これを見ただくと、南西諸島は西表島が一番低くて屋久島が一番高いです。南西諸島は北側が引っ張り上げられている地形です。ですから、島が北側に行くほど高くなっていくということがお分かりいただけると思います。自然地理学では、南西諸島の島を高い島と低い島に分類しています。名瀬市史では、ウェットの島とドライの島という分類があります。奄美博物館では、山の島と大地の島に再分類しました。これは何かと言いますと、隆起サンゴ礁の大地の島は石灰岩でできています。石灰岩でできているので、雨が降ると雨がしみ込んで地下に流れていってしまいます。ですから、隆起サンゴ礁の島には川がほとんどありま

せん。奄美大島では当たり前のように川がありますけれども、実は奄美群島の中では奄美大島は非常に珍しい島です。ですから、奄美群島の中で奄美大島はスタンダードではないということです。こちらの図も私が作ったものですが、南西諸島の国立公園と世界自然遺産の関係を島の地形から表したものです。横枠が国立公園、縦枠が世界自然遺産の島です。縦枠を見ると、世界自然遺産になっている島は全部山の島です。隆起サンゴ礁の島は入っていません。

山の島、奄美大島を見ていきます。これは、奄美大島の代表的な山地です。湯湾岳が 694 メートルで一番高いことは皆さんよくご存じだと思います。2 番目に高い山はどこにあるか皆さんご存じですか。住用の山間とか市の後ろにある金川岳、528 メートルです。ところが 528 メートルの山が奄美大島にはもう一つあります。これがどこにあるかという、大和村にあります。大和村の小川岳、地元では、オゴダケと言いますけれども、こども 528 メートルあります。小川岳があまり地図に入っていない。なぜ小川岳の話をするかと言いますと、この小川岳こそが、住用川の源流になるからです。これが何の地図かと言いますと、住用川の範囲です。これを分水嶺と言いますけれども、周りが山に囲まれていて、これが住用川水系の範囲です。これを見てください。奄美大島の地図に今の住用川の分水嶺を落とし込んでみます。このような地図を皆さんはあまり見たことがないと思いますが、私が作ってみました。住用川というのは、これを見ると、奄美大島を横断するように流れていることが分かります。考えられないことです。島の大半を住用川が横断して流れています。地図上の位置で見ると、大和村の海岸近くに住用川の源流があります。これまた想像できない地形です。これが住用川の秘密なのです。これも皆さん見たことがないと思いますので、今日持ってきました。奄美大島の地図ですけれども、断層があります。地層がずれているのがよく分かると思います。ここに断層があります。実はこの断層が住用川です。住用川というのは断層を流れている川で、断層谷と言われるものです。ですから、住用川はずっと直線です。断層を流れているから直線なのです。ところが、西仲間の手前で大きく直角に曲がります。偶然ではなく、これには理由があります。川は海に向かって流れていきますが、断層の溝があったから住用川はそこを流れてしまいました。でも、どこかで海に向かって流れなければいけません。ですので、断層谷を流れる川というのは、地面の軟らかいところで、急に曲がって海に流れます。ですから、断層谷を流れる川は直角に曲がりやすいのです。これは日本中に実はたくさんあります。例をお見せしますと、四国の徳島県に吉野川という川があります。四国には日本列島を縦断する中央構造線という非常に大きな断層と、仏像構造線という大きな断層がありまして、吉野川はそこ流れています。ここを流れて、ぐわんと曲がって、こちらへ流れていきます。見事にがくぐくと曲がります。断層谷の川にはそのような特徴があります。ですので、住用川は典型的な断層谷の川の特徴があります。

これは、傾斜量地図というものです。どのように見るかと言いますと、地形がなだらかなればなるほど色が白くなります。そうすると、この辺りがやたらに白くなっていることが分かります。住用川のあるところの上流のこの辺りが、やたらに色が白いということは、地形がすごく平らだということです。喜界島とかフェリーから奄美大島を見たときに、奄美大島はこんなに山があるのに、奄美大島のシルエットを見ると、上が真っ平です。それは地形が平らだからです。

この地形傾斜量地図をもとにして、私が奄美大島の中央山脈をずっと入れてみます。そうすると、奄美大島の中央山脈はこのようなルートになります。島のど真ん中を通っていません。奄美大島の山は真ん中が高いのではなくて、実は名瀬からは山が大和村側に寄ってしまっています。海の近くに一番高いラインがあるというおそろしい地形をしています。ここが住用川で、住用川の分水嶺です。奄美大島は、へそのような地形です。住用川の部分の地形断面を見てみましょう。これは簡略図ですが、奄美大島を住用川のところで切るとこのような断面になります。



これを茂木幸生さんは、奄美大島の地形は、「への字だ」とおっしゃいました。皆さんも、への字に見えるでしょう。西仲間の皆さんは、この奄美大島の驚くべき地形を経験則として知ってらっしゃいます、奄美大島は、への字だと。

今度、大和村に行くとまた驚いたことがありまして、福元はタンカンで有名ですが、福元のタンカン農家に私ども市役所の先輩で大海昌平さんという方がいます。「福元の地形を知ってるか。福元というのは島の西側にあるのに、東向きの斜面なんだ。だから、日当たりがいいんだよ。朝からずっと日が当たるんだよ、福元は」と言います。福元は本当に戸円とかのすぐ上です。奄美大島の西側なのに、北側斜面ではないのです。住用川のほうに向いている斜面なのです。これが奄美大島の地形の秘密と言いますか、とんでもないところです。これを地元の皆さんが経験則として土着知として地形を理解されていることにすごいなと感動しました。俯瞰できているわけではないのに俯瞰されているわけです。

秘密はまだあります。これは、環境省が作った『奄美群島国立公園自然環境アトラス』で、環境省のホームページで見られるものです。奄美大島の年間降水量を地図にしたものです。これをどのように見るかと言いますと、色が赤くなればなるほど雨量が多いところで、一番色が赤くなっているところは年間 3,000 ミリ以上雨が降るところです。見ていただくと一発で分かりますが、奄美大島で 3,000 ミリ以上雨が降るのは、名瀬ではありません、その場所は点のように決まっています。白い点線が打ってあるところが大和村の福元です。住用川の上流でめちゃくちゃ雨が降ることがこの地図で見ると一発で分かります。住用川の源流にもものすごく雨が降るのです。同じアトラスで暖かさ指数を見ることができます。色がオレンジになればなるほど暑くて、色が緑色になればなるほど寒い場所です。これにも福元の場所を入れていますが、湯湾岳が一番寒いところです。亜熱帯の島なのに、年に何回か雪が降るのです。住用川の源流は、とても気温が低い地域です。

余談ですが、参考までにお見せすると、カンアオイの分布図です。奄美大島のカンアオイを研究されていた前田芳之さん、残念ながらもうお亡くなりになりましたが、前田さんの博士論文から取ったものです。奄美大島の 6 種類のカンアオイは、ここにミヤビカンアオイとフジカンアオイは、奄美大島全体にありますけれども、オオバカンアオイと、グスクカンアオイは住用川の左岸にあります。それから、カケロマカンアオイとトリガミネカンアオイは住用川の右岸を中心にあるそうです。カンアオイはすごく不思議な植物で、アリがカンアオイの種を運びます。ですから、川が流れていたらアリは渡れないわけですから、カンアオイの分布から奄美大島の成り立ちを考えていくことができるということで、この話を出しました。座談会のときに、カンアオイについて関係する皆さんから教えていただけるといいなと思っています。これは特徴をまとめただけで、ちょうど 7 つあったので、勝手に住用川セブンと書いてきました。

今度は住用川流域の環境文化景観の話をしたいと思います。まず、茂木幸生さんたちにも伺ったのは、西仲間の皆さんは住用川の流域をどのように理解されているのかで、伺った概念と範囲を示した地図がこちらです。新旧の住用ダムより上の場所という理解が一つあって、これは旧ダムと新ダムがあるので、時間軸の変化は認識にあるかもしれません。とにかくダムから上が、いわゆる上流域として理解できます。それから、発電所から下の流域という認識が皆さんあります。これが、中流域として理解できると思います。さらに、国道が住用川を渡っている柳橋という橋がありますが、柳橋から下は下流域、石原集落のものになるということで、柳橋が境界になっているということです。

それから、正確な確認ができていないので、会場にいらっしゃる西仲間の皆さんに教えていただきたいのですが、海の潮が満ちてきたときに、満ちてきた潮は住用川のどこまで上がってくるのでしょうか。聞いたところによると、西仲間集落の少し下のほうまで上がってくるそうですが、柳橋の上流にも上がりますよね。見える環境です。川の水は潮の干満で上がったたり下がったりするのが

見える環境ですから、どこまで上がってくるかということです。柳橋から川が曲がりますけれども、曲がった上までくるのでしょうか。もっと上まで来るのですか。恐らく、その辺りで浜おれをするのではないですか。多分そうだと思います。海のない西仲間集落では浜おれ行事を住用川の川に降りてされるそうです。その浜おれ場所が、どうもぎりぎり汽水域の境目辺りではないかとお話を伺っていて思いました。そういう使い方を多分されていると思います。環境を認識されていて、海のない西仲間の皆さんは潮が上がってくるちょうど境目が浜下おれ場所になっているのではないかと思います。

上流域・中流域・下流域というのを、環境文化について整理してみた表がこちらです。茂木幸生さんにお伺いした内容を私が再構成したものです。皆さんのお手元にもこの表があると思いますのでご覧になってください。核心となるのは、地域呼称と見える環境の部分ですので、ここを説明します。まず、地域呼称は、上流域についてはジョンコ（上川）と呼ばれているそうです。それから発電所から柳橋はウーコです。ウーコは方言で言うと、ウフコ、大きい川という意味だと思います。それから見える環境については、上流域では、ジョンコに関連して、ジョンコブリという言葉があるそうです。ジョンコブリ（上川降り）というのは、先ほどお見せした降雨量の地図を思い出していただきたいのですが、住用川の上流は奄美大島で唯一の局地的にもものすごく雨の降る場所です。ですから、ジョンコブリというのは、そのことを認識されているということでしょう。住用川の上流ではものすごく雨が降るといふ、ジョンコブリという言葉がちゃんとあるということです。これが西仲間の皆さんの環境理解です、土着知です。

そして、ウーコに見える環境というのは、特徴がいくつかあると思いますけれども、谷の幅があります。川の幅ではなく、谷の幅です。中流域の少し上のほうに行くと、両側が岩盤になって谷が急激に狭くなるところがあります。そこに見事にダムができています。それから、西仲間集落を流れるヒヤゴですか、ユギタゴですか、ここの合流点から少し下のほうまで、先ほどの満潮時に海水が押し寄せてきます。ですから、これが、わずかですけれども潮の干満をそこで見る事ができるので、その場所が恐らく浜おれ行事の場所につながっていると思います。

そこで、環境的にも戦略があって、そこでどんな資源を利用したのかということが表に入っています。シイの実、最近はそのように採らなくなりましたが、明治・大正の頃はシイの実を奄美大島から輸出していました。非常に重要なもので、鹿児島とかに向けて輸出されて関西方面にまで流通していました。

今度は、もう少し具体的に、住用川流域で行われてた生業活動について見ていきます。ここも茂木幸生さんから伺った内容を、私が理解している内容と合わせて整理しながらまとめたものです。まず、林業ですけれども集落に近い中流域というのは、中流域から上流域にかけては、右岸はタンギョの滝があるように断崖のようになっていて、川からはなかなか山に上がっていきにくいので、左岸を中心に林業が盛んに行われていました。どのような林業だったかと言いますと、いろいろあったとは思いますが、ある時期の主力だったのは鉄道の枕木の伐採・製材です。これについては、茂木幸生さんから面白い話をいろいろしていただいて、私では全部消化しきれないような内容でしたが、少し紹介してみます。切り出してくる枕木を「スリッパ」と、林業をされている方たちは呼んでいたそうです。スリッパとは何でしょう。履くスリッパしか頭に浮かんできませんが、調べてみると、枕木のことをイギリス英語で、“railway sleeper”と言います。スリッパはスリーパーのことでした。枕木を米語では何と言うかということと“crosstie”と言います。ですから、西仲間の皆さんがスリッパと呼んでいるということは、これは英語の鉄道枕木のことを言っていると分かります。というのを調べてみると、日本の鉄道事業は明治時代にイギリスから招聘してきたお雇い外国人によって進められています。ですので、スリッパの呼称は日本の鉄道史に合致します。イギリス式の鉄道の呼び方がこの西仲間でも使われていたということです。茂木さんは、おじいさん、

お父さんが林業にも携わっていたということで、枕木の寸法を記憶されていました。その寸法がここに書いてあります。この寸法からどういう鉄道に使われていたのかというところまで調べることができます。私は鉄道の専門家ではないので、よく分かりませんが、可能性がある鉄道を一番下に書いておきました。まず、枕木は 2 種類ありまして、シイの木の枕木は内地へ送るもの、それ以外の木の枕木は外地へ送るものという認識があったそうです。外地へ送るのは、広軌枕木とおっしゃっていたそうです。狭軌枕木と広軌枕木という言葉がここにあったことについてもとても驚きました。広軌・狭軌というのはレールの幅のことです。満州鉄道は日本の鉄道の規格に近く、ロシアとかは外地です。西仲間からそういうことまで分かってしまいます。こういうことがものすごいと思って、奄美の林業史はまとめた本がありませんから、茂木幸生さんの記憶は新しい歴史の扉を開くものにもなります。西仲間から日本史を覗くことができるのです。林業の枕木一つからでもものすごい広がりがあります。

今度は午前中にいただいたカニのことをお話しします。住用川のモクズガニをコウガンとかマーガンと皆さんはおっしゃっていますが、とにかく大きいです。笠利とか名瀬とか大和村もそうですが、比べ物にならないくらいサイズが大きくて見て圧倒されました。モクズガニは産卵のために冬になると川を下りてきますが、それを捕まえる漁があります。西仲間のカニ漁に特徴的なのは、入札制度があるということです。入札制度は、かつては奄美大島の川内川でも行われていたそうです。それから、石原集落でもあったそうですが、今現在は奄美大島の中でも西仲間集落のみが入札制度を行っています。帳簿のようなものが残っていて、以前見せていただいたことがあります。100 年以上の記録が残っている大変古いものです。旧暦の 9 月 9 日早朝に漁場の入札が行われます。この写真は 2011 年に見せていただいたときのものです。このように住用川の漁場が区画されています。それを地図に落とし込んだものがこちらです。本流は 5 区画、支流が 4 本です。上流側に行くほどいい場所で、ここに本流側の 5 区画、四角で囲って示している支流 4 つ（イシャゴ、スタルマタゴ、コウタリゴ、ユギタゴ）、それからダムと発電所と、本流とスタルマタゴの合流点、それからコウタリゴと本流の合流点、それから柳橋という区画で、これらを組み合わせて入札をします。

この入札について、少しまた考えてみたいのですが、入札についてルールと利用者と資源管理と社会的役割ということで見ていきます。ルールは漁場の利用権を市場原理で配分するということです。利用者は、西仲間集落の住民のみが入札に参加できる、非常に厳格なものです。資源管理については、皆さんの話し合いと個人の自主管理に任されています。社会的役割ということ言うと、まず入札は集落費の獲得に非常に大事な役割を持っているということと、それから漁業権の管理の役割があります。右側にローカルコモンズと書いてあります。地域資源の共同管理や利用のことをローカルコモンズと言っていますが、多分にこれに該当する要素を住用川の入札は持っていると感じました。入札については、資源利用が集落の維持につながっているということ、それから入札制度によって、資源の管理にもつながっています。ですから、資源の持続的な利用のあり方をこのカニ漁から見るすることができます。

カニ漁でできているのであれば、リュウキュウアユも何らかの方法やルールで復活させる方向性はないのかと不思議に思っていますが、どうでしょうか。採ってはいけませんとなってしまうと、我が事感が低くなっていく感じがします。けれども、こうやってカニのように生活の中に位置づけられているものは、たくさん採っているのにいなくならない、むしろ管理しながら採ることをしているので、そういうあり方はあるような気がします。生物学的な希少性のことは分かりませんが、断言はできません。

それからダムのお話もします。これは奄美大島のダムを落としたものです。この図を見れば、奄美大島のダムは降雨量が多い中央山脈の周辺に建設されたことがすぐに分かると思います。川も、大川、川内川、住用川、役勝川、宇検の河内川、降水量が多い川に集中しています。住用ダムのお話で

す。これももっと詳しくしたかったのですが時間的に無理なので、ざっとだけ触れます。住用川発電所は、日本の水力発電事業の黎明期に建設された非常に古いものです。何と大正 8 年までさかのぼります。大正 8 年というのは日本の電力事業が普及していく先駆期的な時期です。ダム建設を発案したのは徳之島の花徳出身の林為良という実業家・政治家・国会議員でした。ダム建設を手掛けたのは川北電気企業というところですが、パナソニック、以前の松下電器の前身事業の一つです。川北さんという人は、有名な黒部ダムとか、日本の水力発電事業を支えてきたダム建設のプロです。この川北電気企業が奄美大島に来てダム建設をしています。とにかく、注目すべきは、日本の水力発電事業の動きと同時進行していたということです。ここからは推測に過ぎませんが、林為良は早稲田大学の商学部を卒業しています。早稲田大学は皆さんご存じのように大隈重信が創った大学です。大隈重信は早稲田大学で地方から来た学生たちに自分たちの郷里に戻って自分たちの郷里で役立つことをやれと、役立つことは何かというときにインフラ整備をやりなさい、自分たちの出身地に帰ってインフラ整備をやれという教育をしていました。まさに林為良は地元奄美に帰ってきて、徳之島から奄美大島にやってきて、そこで電力事業を発案して、名瀬の有力者たちからお金を集めて大島電気という会社を創って、電力事業に取り組んでいったというものすごいインフラ整備をしているわけです。

南西諸島で最古で、屋久島よりも古い水力発電所です。ダムと発電所とそれから送電線の電柱、これらがすべて今でも現存しています。電柱は木でできていますから、茂木さんに伺ったら、木自体は腐っているけれども、根本の部分はまだ残っているそうです。現状、メンテナンスして大正時代よりあとに立て直した電柱が残っているのだと思いますけれども、ダム本体と発電所は大正 8 年に竣工したものが完全に残っています。これは非常に珍しいです。今、この手のダムや発電所が近代の産業遺産として日本全国で国指定文化財に指定され始めています。これほどのものが非常にいい状態で住用川に残されているので、これはぜひ奄美市でも取り組んでいただきたいと思います。奄美市は文化財課がありまして、私の古巣ですが、そういう部署がありますので、保存活用に向けて取り組んでいただきたいと思います。この建設時の記念碑も発電所の近くには残されています。

時間がいよいよ厳しいので、集落の環境文化景観は飛ばします。集落ありきのところがありますし、本当は集落空間の話は私の一番専門とする得意分野なので、この話をしたかったのですが、今回は省きます。申し訳ありません。

長い話にお付き合いいただいて恐縮ですが、昔大ヒットした小説の『世界の中心で愛を叫ぶ』をもじりまして、「世界遺産の中心で何とかを叫ぶ」というふうにしてまとめをしたいと思います。これは国立公園の中心です。それからこれは世界自然遺産で、今日見てきた中央山脈の地図です。世界遺産の登録地というのは中央山脈の地形、この太い線で引いてある形、それから住用川・川内川・役勝川の 3 河川の流域が世界自然遺産登録地の中心になるところです。ですから、国立公園とか世界遺産の登録の地図に、河川の分水嶺をぜひ入れていただきたいと思います。そうすると、河川の分水嶺のエリアと、遺産とか国立公園の関係がもっとはっきりしてきます。河川の分水嶺というのは、住用町の場合、長い面積を持っていて、緩やかな東南向き、東向きの斜面を形成しているのが大きな特徴です。それから流路が長いので、河川勾配が緩やかだという特徴があります。大和村の川は、山が海までせり出してきているので、流路が短いですし、非常に勾配が急です。ですので、この地形はとてもいろいろなところに関係してきます。住用川は河川の源流域は標高が高くて、局部的に降雨量が多いわけです。その下側に緩やかな傾斜面となる山地が続いていきます。その日当たりの良い地形に世界自然遺産の生態系が育まれているというのが全体の構造です。ですから、住用町が世界自然遺産の中核となる重要な生態系を持つ地域だというのはそういうことなのです。ここで、世界遺産エリアに赤い円を引いてみました。赤い点が打ってあるのが、世界自然遺産

エリアの中心です。この赤い点はどこでしょうか。西仲間です。西仲間に赤い点を打ちました。皆さん、私たちは世界自然遺産エリアの中心に今いるということです。

環境文化という視点で、環境を捉え直していくと、人と暮らしの関わりの視点、見える環境・見えない環境というのが浮かび上がってきます。これは先ほどから言っています、環境適応と資源利用が見えてくるのです。今日は世界自然遺産の麓の価値と利活用というテーマですが、私としては、西仲間集落は麓というよりも世界自然遺産環境のど真ん中にあるという認識です。そこで、このあとの座談会につないでいきたいと思います。次のスライドには、冒頭で取り上げた環境文化型国立公園に関する 1～3 までの問いに対する私なりの見解をまとめてあります。これもお手元の資料にありますので、お目通ししてみてください。

私は座談会で、世界自然遺産の中心で何を叫ぼうかとこれから考えたいと思いますけれども、皆さんもぜひ何かを叫んでください。長い時間ありがとうございました。終わります。

-----高梨さん、どうもありがとうございました。次の座談会にいいネタを提供していただいている感じがします。

【住用地区の森とウーコ^{ウーコ}における環境文化に関する座談会】

これより座談会を始めたいと思います。座談会の司会は、鹿児島大学法文学部教授の小栗先生にお願いしたいと思います。皆さま、よろしくお願いします。小栗先生、よろしくお願いします。

司会挨拶 鹿児島大学法文学部教授 小栗有子

今から住用地区の森とウーコにおける環境文化に関する座談会ということで進めていきたいと思います。この座談会は、前にいらっしゃる方ともお話をしますけれども、今日、せっかく各地から来られているので、会場の皆さんとも意見交換していけたらと思っています。まず最初に参加者の確認です。フロアの方も含めて、該当する方は挙手をしていただきたいと思います。よろしいでしょうか。環境省関係者は挙手をお願いします。お一人ですか。ありがとうございます。地元自治体ということで、職員関係者はいかがでしょうか。3 人ぐらいでしょうか。住用町出身の方はいかがでしょうか。ありがとうございます。地区外から来ましたという方はいかがでしょうか。ということで、実は地区外の方が非常に多い、このメンバーでやっていきたいと思っています。



今日の目的ですが、こちらに書いてありますように、一つキーワードになっているのが国立公園ということです。環境文化型国立公園ということの保護と利活用ということですが、その可能性を考えるための流域文化体験が、先ほど午前中にあったフヤフヤ汁で、体験として皆さんと共有したことです。流域の生活史ということに関しては、先ほど高梨さんから話がありましたけれども、これから皆さんと共有していきたいということです。今日の目標は、先ほど A、B、C、D ということで挙手をしていただきましたが、皆さんと一緒にやれること、あるいはやりたいことを見つけることです。この座談会をきっかけに住用地区の住民の方はもちろん世界遺産センターの関係者、環境省の方もいらっしゃいます。外から来ているわれわれのようなものも大勢いますけれども、まず、お互いを知りながら、各々の関心や目指すところを共有したいというところです。その各々が目指すところを実現するために、恐らく相互に協力できることがあるだろう、それを見つけるということの時間にしたいと思っています。

それで、ここについてもう少しだけ補足します。なぜあえてこういうことをしたのかというと、またそれぞれの方に話を振っていきますが、環境省の言う国立公園ということに関しては、国立公園が前提で世界遺産地域という高梨さんが中心だとおっしゃっていただいたことと、このフィールド

をもっと活用していく、もっと知ってもらう、もっと価値を高めてもらうというところが環境省側としても考えていきたいということです。地元自治体の、先ほどご報告がありましたけれども、これからの住用の 10 年をどうするのかということで、計画が出ています。自然を活用した稼げるまちづくり、災害に強いまちづくり、定住促進ということで、行政としても目指したいことがある、そして、地区住人の方は、地区によって、世代によって属性によって、さまざまな思いを持っていますし、多分、共通できるのは、この住いで幸せに暮らし続けたい、あるいは次世代につなげていきたいというところは多分一致しているかと思いますので、これらにわれわれの地区外専門家という言い方もありますし、皆さん関心を持っていらっしゃる方も、どういふふうに協力をしながら一緒にできるのかということを見つけていけるのかということこれから時間にしていきたいと思っています。私の導入の話はそんな感じです。

先ほど、高梨さんから話がありました。高梨さんから土着知という言葉が出てきました。土の知と書きますけれども、その土地と人々が関わる中で獲得されてきている価値観とか知識とか技能、多分この獲得の仕方、学校で学ぶのとはずいぶん違います。恐らく体験したり、痛い思いをしたり、そういったことが一つ高梨さんから提供されました。そしてもう一つ国立公園ということで、環境文化型とはベクトルで生物多様性という概念、あるいは少し言葉を土着知と区別すると、科学・生化学という知見から見た両側面から考えていきたいと思っています。

ここで、広野さんにもう一度お願いしたいのですが、高梨さんの上流・中流・下流の話と重ね合わせて、国立公園の指定がどこなのか、あるいは世界遺産のコアがどう被るのか、その辺りを補足いただきたいと思います。よろしいでしょうか。

広野：環境省の広野です。今、正面の地図に示されている部分で、地図中央付近に住用地区がありまして、赤枠で囲まれた色が変わっているところが、世界遺産として登録されたエリア、世界遺産登録地域になりまして、先ほど高梨さんからのお話の中で、住用川がずっと遺産地域のコアな中心的なエリアのほうにまっすぐ伸びていって、大和村との境界付近に上流が至るというような位置関係かと思っています。その登録地域の周辺が、いわゆる緩衝地帯と呼ばれていて、さらにその周りが周辺管理地域と呼ばれていて、三つの区分に分かれていますけれども、住用地区を中心に見ますと、まさに遺産地域に囲まれたような地形の中にあって、かつ緩衝地帯を伴っている、まさに人の生活と遺産地域が結びついているような、奄美大島全体の中でも、そことの位置関係が緊密な場所にあると言えると思います。先ほど小栗先生がおっしゃったように、世界遺産として生物多様性が最も評価されたコアなところがこの登録地域というところですが、まさにそこが大川の中流から上流域に伸びていっている、奄美大島全体で見ても非常に貴重な地理的環境にあると思っています。

小栗：そうしましたら、午前中にフヤフヤを作っていた和田さんにいきなり振ります。この地図で、われわれが食べたカニはどの辺りで捕えたのか補足いただけますでしょうか。

和田：9 月 9 日に入札して、タカが鳴くとカニが下りてくると年配の人たちから聞いていまして、ですから、タカというのはハヤブサのことです。カニがだんだん上流から下流域に下りてきて、今はもう 12 月ですから下流域になりますので、大体から冷川前後ぐらいかと思っています。今、カニを集めてくださった区長さんが、発電所から柳橋の間で採れたカニだと言っています。

小栗：ありがとうございます。そして、そのカニをいったん集めてそこで肥やして今日準備いただいたということでしょうか。

和田：この話がありまして、西仲間石原地域の老人クラブが動きましたので、そのあと、何匹か採れますので、それをためておいて、100 匹を今日持ってきました。採ってからそのまま置いておくと、死んだり痩せたりしますので、そこに餌を与えて飼育して、その餌がうどんだったりかぼちゃを細かく切って与えたりして、そうすると、卵をだいぶ抱いてきて真黄色になって随分と太っていました。

小栗：ありがとうございます。そうしましたら、これから皆さんと話を進めていきたいと思いますが、午前中、このメンバーと打ち合わせをしたときに、茂木さんがこういうことをおっしゃっていました。要はまだまだ知らないことがたくさんあるということです。今日、高梨さんからわれわれはお話を伺いましたが、おそらく皆さん自身がまだまだわれわれの知らない話を持っているのではないかと思います。ですので、実は、考えているのは、最初に 2～3 分ぐらい、特に高梨さんの話を聞いて、どのようなところに皆さん関心を持ったのか、自分ももっとこういうことを知っているというものがあれば、ぜひ共有する時間を取りたいと思います。まずは、各テーブルごとにお話をしていただきたいです。そして、2～3 人ぐらいになって、どういうところに関心を持ったのか、どういうことをもっと話したいかということ、少し時間を取りますので、話をしてみてください。登壇者の方には、どんな話があったか、また、お互いにどんなことを聞いてみたいと思ったのか、そんなことを各テーブルからお話していただきたいと思います。3 分では短いでしょうか。3 分ぐらいで話をし、はじめまして、こんにちは、どこから来ましたということをお願いしたいと思います。



小栗：ありがとうございます。そうしましたら、先に島崎さんと師玉さんのところに行ってもいいですか。どんな話があったでしょうか。それで、前半は、地元の方々の川との関わりあるいは人との関わりということを知りたいと思います。どんな話をしたとか、どんなことをさらに補足したい・聞きたいなどがあればと思いますので、お願いします。

島崎：こんにちは。島崎です。よろしくお願いします。先ほどの高梨さんの話がとても面白くて、話せば話すだけでもぼやけてきそうですけれども、私は住用町の石原、住用川の下流で生まれて、西仲間で育って、最後に神屋集落で今も実家はあります。下流・中流・上流付近で遊び方が全く異なって、下流のときは、父親とカニとかと一緒に採りにいった記憶があります。西仲間に住んでいるときは、テナガエビを採っていて、上流に行くと、もう 30 年以上前ですけどもリュウキュウアユを採ったりとか、遊び方がそれぞれ変わっていました。そのときは、まだ保護しようとはなっていないので、遊び半分に採っていたり、食べたりとかはしていました。関わり方というのを、今、話を聞いて、生活の一部だったのだと認識しました。当時は全然遊び場として、今でも子供たちを連れて遊びに行ったりしますけれども、遊んでいたことが、今、話す機会を設けていただくということが、すごく感慨深くて、これからいろいろ、今、どの世代に当てはまるか分かりませんが、今、43 歳ですので、次の世代につなげていくという上では、茂木さんだったり和田さんだったりから教をいただいてやれるのかなと思い、座談会では今こちら側にいますけれども、話を聞いて、すごいテンションになっています。これから時間の許す限り、皆さんとお話できればと思っていますので、どうぞよろしくお願いします。



小栗：師玉さん、何か補足があればお願いします。ぜひ、簡単に自己紹介をお願いします。

師玉：住用町見里出身の師玉です。住用産業建設課に勤めていまして、小さいときから住用町で育って、今は行政で皆さんにお世話になっています。よろしくお願いします。補足ではありませんが、島崎さんが言ったように、われわれが普通に生活でやっていたことが、今話題になっています。そして、ここから先、自分たちの子供につなげないといけないことですけれども、やはり泳ぎにいくのも保護者が一緒に行くなど、いろいろハードルが上がったり、これは駄目というものが増えていく中で、おじいちゃんやおばあちゃんと一緒になって子供たちにつなげていけるような形をとればいいと思っています。私たちもリュウキュウアユとか環境・自然というのが身近にありすぎて、何が大事かということが分からずに育ってきたので、今回、とてもいい機会を与えていただいていると思っています。よろしくお願いします。

小栗：ありがとうございます。今度は、広野さん、久さん、高梨さんチームではどんな話が出たかご紹介いただけますか。

久：時間は短かったですけれども、最初は高梨さんの話を聞いて、やはりこの東向きの斜面の長さで、やはり林業に適していたのではないかと、そういった産業が非常に盛んな地域であったことが非常に納得いく話でした。



広野：上流域にタンカン畑があって、また枕木の輸出が非常に盛んだったと、林業の側面からもこの広大な平らな地形にかなり恩恵があったのではないかとということと、そういったことも住用の集落から見ても非常に村が栄えてきた一つの大きな要因だったのかと、その辺りのことをお聞きしていたところでした。

小栗：広野さん自身はどうですか。新しい発見や気づきみたいなものはありましたでしょうか。

広野：普段何度も通っているような場所でも、今日のような話を踏まえて、そこをまた同じように訪れると見方が変わるということが、自分にとっての一番大きな意義に感じます。そういったものを来られる方にもぜひ知ってほしいし、面白さに気づいていただくことが国立公園として大事なことだと思って、そのようなきっかけを一つでもいただきたいと思っています。

小栗：ありがとうございます。高梨さんに振ってみたいと思います。今日、せっかく皆さんがいらっしやいますけれども、何か聞いてみたいこととかありますか。もっとこういうことを聞いてみたいなどありますか。

高梨：もっと聞いてみたいことだらけです。私はどこまでいっても、インタープリテーションをやっているわけで、皆さんがやっていることは実はこういう意味ではないですか、こうかもしれないですよということをやっているんで、皆さんからいろいろなことを教えていただくことを仕事としているところです。

小栗：そうしたら、また和田さんと茂木さんに移っていきたいと思います。茂木さん、今日の話を

伺って、何か新しい気づきとか、どんなふうに話を聞いていらっしやったか、感想をいただけますか。

茂木：高梨先生にずいぶんお褒めの言葉をいただきまして、何十回も茂木幸生という名前を聞いて、ちょっとは名前が売れたかなと感じているところです。私は、何回も言っていますが、すべてを知り尽くすことはできないと、いつも思っていますので、われわれが知っている儀式、あるいは聞き伝えたこと、親、おじい、じいさん、ばあさんから聞いたことを、高梨先生があのようにまとめてくださったのは、非常に有意義なことだったと思います。それは学者としての、お二人が並んでいらっしやって、同級生ですけれども、奄美市と言えども、奄美群島の方なのではないのかという気がしています。



小栗：ありがとうございます。お互いの褒め合い合戦になっています。

茂木：良い子の茂木です。

小栗：茂木さんにお尋ねしたいと思っていて、奄美大島はへの字だという言葉を出されたということでした。高梨さんは今回のことがあって、環境省の作った地図などいろいろなことを重ねて、気づいたということだと思いますが、茂木さんは、違った形でへの字ということに気づかれたと思います。その、への字だと、はっと思ったのか、いろいろ伝承されてきたのか、そこに気づく過程についてご紹介いただけますか。

茂木：よく言われるように、われわれの古い、もうずっとアメリカに旅立った人ばかりですが、その方が言われるには大和村の＜不明＞すると住用川に流れてくるとい、あるいは、マテリアヌコモリ、今、ミッション系みたいなキリスト教みたいなマテリアの滝とか言っていますけれども、本当は、あれはマティダです。マティダヌコモリです。日がさんさんと滝つぼに照っている、その水が源流だとずっと聞かされておりましたし、実際にそこに現場に行ったとき、これは地図で確認しても間違いなく感じました。一番分かりやすい言葉で言うと何だろうと考えて、奄美大島は少し斜めですから、東西とはいきませんけれども、大和村と西仲間を横断したときに、への字に断面になるというのがそういうことだったわけです。への字の短いほうが大和村で、長いほうが住用域です。けれども、への字の頂点に大和村と旧住用村の境があるわけではなくて、この地図で見るとそこからかなり寄ったところに確かにあります。それは感覚的には分かっていた。上のおじいから聞いた話もありましたし、自分であとから、そうだよな、確かにそうだよなと思ったこともあり。今日、高梨先生が示されたこの黒いあれなんかは全く分かりませんでしたけれども、そういうふうには考えていました。

小栗：少し時代をさかのぼって茂木さんたちの若い頃、区長さんもいらっしやいますから若い頃を思い出していただいて、実際にその現場、先ほど林業の話とかもありましたが、ご自身の林業のご経験はいかがでしょうか。

茂木：私は祖父が龍郷から来て、石原のつぼで製材工をやっていました。おやじはもちろん山師と言われるあれでしたけれども、私自身はおやじに連れられて行ったことはありますが、それを生業

としたことはありませんでした。ただ、ずっと、私は男 1 人だったものですから、おやじがあちこちにずっと引っ張り回していたことはありました。

小栗：ありがとうございます。山の経験というのは、今日、参加されている方にはいらっしゃいますか。やはり、もう経験されている方はいらっしゃらない感じでしょうか。

島崎：自分の父は佐賀出身ですけれども、昭和の 40 年代に移住してきて、住用で林業を、島崎林業という林業を立ち上げています。そのときは、先ほど言った枕木などではなくて、樽をやっている、そこの戸玉集落だったり、今はありませんがそこに運んで、そこからいろいろな工場に送るということをやっていました。先ほどの、への字の話だったりとか、斜面の話を聞くと、やはり父親が林業で伐採していたところは、住用だったり太平洋側が多いイメージがあります。

小栗：和田さんは、沖永良部のほうから移られてきたということです。実際に先ほどの話でも人々の暮らしは川とは切っても切り離せないという話をされていますけれども、和田さんとしてはどういった場面で切っても切り離せないと感じることがありますか。

和田：子供たちが小さい頃には、夏休みのときに、暑いので、その当時はまだクーラーがない時代でしたので、暑いとおにぎりをして、川に行って泳いだり、タナガ採り、テナガエビ採りをして、暑いときの過ごし方は川で過ごすというのが一つです。それから、昭和 40～50 年代でしたので、主人がよく投げ網で、リュウキュウアユを採って、アユの産卵場所をよく、産卵期になると、ひと網投げると、50～60 匹ぐらい、持ち上げられないぐらい採れたりとか。子育てをしたり、生活するのに、お客さんが来ても、住用ですとすぐこういうカニのフヤフヤを作ったり、カニ汁をしたり、アユの塩焼きをしたりとか、テナガエビの塩蒸しをしたりとか、すぐお客さんに提供できるという、食の文化が豊富だと感じたり、住用は本当に川があるために、豊かだなということを感じていました。

小栗：今日午前中に、一緒に作られた方は、いらっしゃいますか。帰ってしまわれましたか。では、師玉さんと、島崎さん、多分島との関わりかたとか楽しみというのは、和田さん・茂木さんの世代とまた違うと思います。皆さんにとっての島との関わり、どんな思い出があるかとか教えてもらえますか。

師玉：関わり方というより、普段の生活・遊びがもう川ありきで、私たち住用の子供たちは海で泳いだ記憶はあまりなくて、海で泳ぐのはお出かけをして泳ぐもの、普段の生活では川でしか泳がないものですから、海の怖さも知らずに大きくなっています。高校生になって初めて大浜海岸で泳いだとか、そういう生活をしていたので、名瀬・笠利の同世代とは違う関わり方だったのかなとは今考えるといます。

小栗：島崎さんはどうですか。

島崎：師玉さんが言ったとおり、夏休みとかは、もう 40 日間ずっと川で泳いでいたぐらいです。私は水泳部ですけれども、水泳が終わったあとに川に行っていたぐらい、真水で生きていた時代でした。海流、そして塩水につかるのは、名瀬の高校に行くようになってから海に行くようにはなりました。少しサーフィンとかやったこともありましたが、普段遊ぶのは川でした。

小栗：高梨さんの今日の話の中で、例えばジョンコブリとか、非常に激しく雨が降ったりとか、今日の、への字の話とか、その辺りは師玉さんや島崎さんにはどうでしたか。知っていた話でしょうか、初めて聞いた話でしょうか。

島崎：奄美の地図自体は、何となく把握できていますが、への字という概念、傾斜がきつくて緩くなっていることは、生活の一部として捉えるとそうだったのだと今日気づかされました。

小栗：その気づきは、特に何に気づいた感じですか。

島崎：川の流れだったりとか、父親がやっていた林業の仕事がやりやすかったらう地域だったりとか、生活する上での気づきがありました。

小栗：ありがとうございます。広野さん、ここまで聞いていて、今日のテーマは山と大川をつなぐということですがけれども、広野さんから見ると、山と川のつながりということは何が住用町では特徴というか大切にしなければいけない点と思われませんか。

広野：このような地域において、上流域は国立公園だったり世界遺産地域だったり、われわれが直接保護している場所だとして、流域のこういった住用の集落などには、いわゆる文化と呼ぶにふさわしい人の営みがたくさん点在しており、そういったものが常に見え隠れしているような状況だったと思います。今日はそれらを一つの川を通してつなぐかたちで、今日そこでいろいろな体験とか面白いことをお話をいただいています。われわれがそれを全体としてどのように流域全体としてつなぐで、来た方にも分かりやすく面白さだったりここにしかないような魅力として、一つでも二つでもどう伝えていけるのかというところが最大の課題だと思っています。ですから、山と川というものが、本当に雨だったり川遊びだったり、水、滝もあったりということで、いろいろな要素がたくさんこの流域の中にあると思いますけれども、その辺りをどういうふうの一つの面白さやストーリーみたいなものにして持っていけるかなと、その辺りを後半に期待したいと思っています。

小栗：高梨さん、今日お話ししていただけるのは、やはり長いこういったところの一つの場所だったということですがけれども、高梨さんが今回いろいろ調べたときに、全体がつながっていく、つまり上流・中流・下流がつながってきた感を高梨さん自身がお持ちなのかなと思いました。そういう理解でよろしいですか。

高梨：博物館を 2021 年でしかかにリニューアルしたときに、奄美大島の地形模型を作りました。高さは実際の高さの 1.5 倍比で作ったのですが、立体の模型を作ったときに、初めて住用地区の地形を見て、川がまっすぐであることとか、こんな地形になっていたのかと、模型を見て初めて気づいて、あっという感じでした。仰天するような印象がありました。そこから全体がつながって見えるようになりました。

小栗：茂木さんは、実際に山と川のつながりみたいなものを、経験的に感じるということとありますか。

茂木：山と川、少し余談的なことになりますが、小さい頃は、牛を飼ってまして、小学校 6 年まで飼っていて、親子の牛がいました。つながるかどうかわかりませんが、小学校 6 年のとき、畑の

小屋を作るので、台風のとに、親父に連れられて、親子の牛を 2 頭引いて行きました。川に、山から根こそぎ木が流れてきているのです。そのシイの木をおやじに連れられていって切って、子牛に 1 本、親牛に 2 本を、カグというよりが入らない金具があるんですけども、それで引っ張っていきました。川伝いに牛が引っ張ると軽いんです。それが川と山の関わりになるのかなと思います。それと、ユリネともヨリキとも言いますが、われわれは、そのタビ、今は流木と、流れる木と言いますが、われわれの感覚の中ではユリキ、ヨリキ、寄ってきたものだという感覚があります。こちらに集まってくるものです。たまに集まってくるゴミにしても、ユリブンとかユリペというふうな感じで、われわれには流れてきたという感覚ではないわけです。だから、こちらに恵みを与えてくれるものという感覚だったのではないかと、私は今でも思っています。

小栗：フロアの方で、何かエピソードをご紹介いただける方はいらっしゃいますか。区長さんはどうですか。

区長：私はあまりありません。

小栗：でも、実際に、戻ってきて、小さい頃はこちらにいらっしゃったのですか。

区長：高校までいました。

小栗：その頃はどのような暮らしとか遊びとか楽しみがありましたか。

区長：やはり川遊びをしていて、アユとかは自分で捕まえて食べてました。カニはおやじが採ってただけで、私は昨年帰ってきてから採り始めました。モクズガニです。

小栗：山と川をつなぐといっても、いろいろ記憶の話をしていると思いますけれども、これから新しくつくっていくとか、体験していくといったときに、例えば島崎さんとか師玉さんとか次世代につなげたいとおっしゃっていますが、どんなことを一緒にやっていきたい、どんなことを残していきたいとお考えですか。あるいは実際にしていきたいと思いますか。

師玉：子育てをしていく中で、私たちが小さいときにやっていた遊びを、子供たちにも遊びとして教えるという、タナガを採りに行って、自分で網を準備して、竹を切って 作ってという、そういうことが大昔から大先輩方がやってきて子供につないで、また子供につないでやってきた部分だと思っているので、遊び一つにしても、自分たちでやってみる、やって失敗していく中で成功、こんなにしたらうまく行くよねという成功体験ができれば、子供たちもそういう遊びをしていくだろうし、なかなか私たちの世代は自分たちで



川に遊びに行っていた世代ですけれども、先ほども言ったように、今の住用の子供たちは川ではなく、どちらかというと海に行く世代になっているので、やはり、西仲間のカニ漁だったり、いろいろ、アユは採れないですけど、川でできる遊びを子供たちにつなげていく世代なのだと思っています。実際に私たちも上の先輩方から教わったというよりは、見様見真似で始めて、やってきたことも多いと思うので、生活の一部だったから、自分たちでタナガを採って食べたり、海でムギフミという二枚貝を採って自分たちで焼いて食べたりとか、そういう感じだったので、私の世代は海と

川とがあるおかげでという意識の中にはいなかったのかな、それが曖昧だったと思います。住用町は「森と水の町住用町」というので、ずっと私たちも育っているので、意識的には水の多い雨の降るところだという感覚では生活しています。

小栗：島崎さんはいかがですか。

島崎：自分は子供が中学校 1 年生で、今まさに自分がやってきたことを夏休みや休みの日には常に、近くにキョンゴという川もあって、そこで泳いでいたんだよというのではなくて、一緒に泳ぐ。タナガ採りも、あそこに行ったら採れるではなくて、一緒に行き採る、今まさに毎週末一緒にやっています。それは、全部父親から教えてもらったということを、全部自然に自分がやれているという感覚があります。多分、これはまた、自分の息子がまたその息子に引き継いでいくのではないかと思います。根本的な昔のなれそめだったり、これがこうなって昔の人が言い伝えたんだよということは、うまく伝えられないですけれども、うまく自然の川だったり水だったりという遊び方はもう常に教えるようにして、子供の友達も一緒に連れて行ってというふうにつながって、今、まさに教育中です。

小栗：ありがとうございます。一緒にやっていくということで、お二人からお話がありました。茂木さんと和田さんは世代がまた上になると思います。こういったものを一緒に伝えていきたいかという点ではいかがですか。

和田：やはり川との関わりは、私は孫たちが地元にはいないので、夏休みに帰ってきたときには必ず川に連れて行って、そして、川でタナガ採りをしたりして、弁当を持って行って 1 日泳がすとか、そういうのをしています。自分たちも一緒に楽しみながら子供や孫と一緒に川遊びができたらいいなと、今、島崎さんもおっしゃったように、やっぱり自分も一緒に行き、子供も連れて行って、そこで体験をするというのが一番次の世代につなげていくのはいいのかなというふうに思っています。

小栗：茂木さんはいかがでしょうか。

茂木：私は 11 月いっぱい所用があつて大阪に行っていましたので、ガン採りができなかったのですが、今、次男坊がカニに餌を入れたり、引き揚げたりをようやくやってくれるようになりました。おとしぐらいの正月に、柳橋にカニ籠を付けたときに、カニ籠にチヌが入りました。これはいいと思って、写真とかをあちこちに送りました。それから、先ほど島崎さんや師玉さんがおっしゃった、話ですが、実は私どもの小学校時代は学校にプールがありませんでした。プールができたのは、昭和 46 年に住用小学校にできたのが初めてです。小学校 1 年から 6 年生までの夏休み前の水泳の授業は川でした。川で 2 時間、自然の役勝川でした。すぐそばにありますから、役勝川で泳ぎました。だから、楽しかったです。競争はできませんでしたけれども、＜不明＞メガネを持ったりして、川の生物を見ることが、それこそタナガだったり、ヤジだったり、ウナギだったり、カワニナがあったり、そういうのを見る機会がたくさんありました。そのほうが楽じゃないかと、プールで競泳なんかをやるよりも、絶対そっちのほうが楽しいというような記憶があります。

小栗：ありがとうございます。今、皆さんが関わってきたことをどのようにつないでいくのかという話だったと思います。多分市の計画として、稼ぐという言葉も出てきていますし、学校という言

葉も出ていますけれども、これをどういう対象とまた共有をしていきたいのか、その辺りを皆さんにお伺いしたいです。それから、高梨さんは、今日、目に見えるものと見えないものという話をされたと思いますけれども、そういった観点から、今 4 人がお話してくださったことに対して、高梨さんとして、今日どんなことを見えない部分あるいは見える部分について補足したいということはありませんか。

高梨：補足ではありませんが、流域というのはすごく大事で、この自然をもっと入れてほしいというのがあります。仕事柄、流域にはすごくこだわります。なぜかという、例えば縄文土器には模様がついています。縄文土器にはざっくりとまとめられる何々形式というのがあるのですが、関東地方とかの研究で分かることは河川の水系ごとに模様が違うのです。分水嶺というか、河川の流域単位に人の暮らしというのは社会単位ができ



上がってくるといいうか、そういうベースになるものなので、仕事柄、いつもそういうところを見てしまいます。それは奄美大島でもただの川ではなくて、きちんと分水嶺を捉えて川内川、住用川とか、それをきちんと単位として把握していくというのは、環境文化を考える上ではとても大事なことでと思っています。それから河川の勾配の話をして今日はあまりできませんでした。住用川のカニが大きいという話をしましたが、あまりにもカニが大きくて、驚かされます。これは、絶対的な比較はできないでしょうが、奄美大島の他地域の標準的な大きさのカニと、住用川のカニを一緒に並べたらいかに住用川にカニが大きいかが一発で分かるような気がします。そういうことはフヤフヤの価値をさらに高めるような気がします。住用川を理解することが、ここにしかない料理プラス、カニ自体がそもそも違うということにつながるのかなと。川が長くて勾配が緩いから、カニが大きくなりやすいのかと思うのですが、それは逆に専門の環境省の皆さまからはどう思われるのか聞いてみたかったです。

小栗：広野さん、勾配についていかがですか。

広野：正直、その水系ごとの繊細な変化については、理解が追いついていないところです。申し訳ありません。

小栗：ありがとうございます。久さん、いかがですか。これからつないでいくと言ったときに、見える環境・見えない環境という話も出てきましたが、こういった視点をぜひというところはありませんか。

久：質問の答えになっているかは分かりませんが、高梨さんの話でシイの実が大事だと、枕木としてもシイの木のほうが価値が高かったという話を聞いて、住用地域の豊年祭を見ますと、豊年の相撲の土俵の四本柱の先に、やはりシイの木の枝を付けます。やはり大事にしている象徴ではないかと思ったりしていました。特に城の集落では、豊年祭が終わったあと、そのシイの木の枝を下ろして、みんなで分け合って家に持ち帰って祭壇に飾ります。供えるのです。それほど大事にしているのかなと思いながら話を聞いていました。ですから、シイの実を採ることも少なくなってきましたが、豊年祭ではシイの木を大事にまだ考えていることを考えると、何か手立てがないかなと思ったりはします。

小栗：シイの木に関して、何かお尋ねしたいことはありますか。

久：そういった気持ちが今でも残っていてやっているのか、毎年やってるからやっているのかとか、そういう思いを持っていらっしゃるのかを聞きたいです。

小栗：いかがでしょうか。どなたでもいいですから、お願いします。

茂木：われわれの集落もシイの木を飾ります。照葉樹と言われている裏が金色に輝くのです。住用方面と東城方面というように分けて考えますと、私の女房が東仲間の島娘ですが、一般的にこちらの門松は松の木と竹とユズリハを使いますが、女房のふるさとは、義父がそれにシイの木とウラジロまでして五つにしてみました。これはいいなと、私もそれ以来 30 何年その門松を作っていますが、その中に、結局、松と竹はもちろん、ユズリハは時代を譲るということで、そこにシイの木を飾るというのは、先ほどわれわれは正月飾りも十五夜豊年祭く不明飾りですが、さっき久さんが言われたそれを持ち帰って飾るというのも、く不明シイの木を非常に大事にしていたというのは、そういうことかなと、門松に飾るくらいですから、やはり縁起がいいということもあったのではないかと思います。

小栗：久さん、どうですか。

久：ありがとうございます。門松に飾るのは、まだ見たことがなかったので、ぜひ見たいと思います。

小栗：ありがとうございます。島崎さん、今日午前中の打ち合わせで住用を知ってもらうためにいろいろなイベントを開催するというので、まだまだ知らないことが多くて、もう少しコアな部分を知りたいという話をされていましたが、実際にイベントをしていて、何が今足りないかなということがもしあれば、共有していただきたいです。

島崎：先月終わったばかりですが、結ノ島 CAMP というのをそのマングローブパークでやっていますが、その趣旨として一泊二日で奄美は集落の島ということで、集落のような関係性を築こうというので、10 年前から始めています。それで全国各地から 2,000 人弱くらいの来場者がありまして続けています。その中で、一泊二日で島のような関係性をということで八月踊とか、ワークショップだったり、いろいろなものをやりますが、もともと出身が住用なので住用で開催したいという気持ちがあり、この自然を知ってもらいたいという思いから立ち上げた次第です。何が足りない。足りないものというと、まだイベントに集中しすぎて、奄美そして住用の良さを来たお客さんに伝えきれていないところがあります。今後はこういうカテゴリーの中に、近くに集落もありますし、まさに今日話をしている住用川も近くに流れているので、その根本的な今までの流れてきた生活の知恵だったというのを、あらためて来たお客さんに伝えて、イベントとしてもっと充実したことをやっていきたいと、今日、この座談会を聞いて思いました。

小栗：そのために、どういう協力とかがあれば島崎さんは助かると思いますか。

島崎：でも、結構茂木さんだったり和田さんだったり、八月踊で協力はしてもらっています。その中で、ワークショップというカテゴリーをイベント中に設けていますが、そこで集落の話が聞ける

ワークショップをやってもいいのかなと思います。

小栗：ありがとうございます。師玉さん、今日は行政と地元の両方の立場で参加されていますが、今後住用のまだ見えない部分を掘り起こしながら、それを共有していくということで、これからやってみたいこととか、何か考えていらっしゃることはありますか。

師玉：今年度から始まった地域創生戦略の中に、集落ガイドの育成というのがあります。もう既に和田さんやその他何名かが住用町のそれぞれの集落でガイドをして案内する形ができていますが、その下の世代の育成をしないとつながっていかないと思っているので、その力などを借りて、今年度下準備をして、来年度には西仲間周辺の集落ガイドの育成ができたらと思っています。それができてくれば、西仲間をモデルとして、東城地区、市地区、また役勝方面に広げていって、観光の目玉として、集落歩きで集落の方しか知らないことが結構ありますので、そういうものをしっかり作っていきたいと思っています。そこもまた島崎君のイベントの一つでできたら、私たちからも協力が可能かなと思っていますところです。

小栗：今、ガイドの育成という話も出てきましたけれども、高梨さんは先ほど提起された流域間とか集落間のつながりということに関しては、何か期待することとかありますか。

高梨：集落の話は今日は全部省いてしまいましたので、集落空間のことはぜひ押さえてほしいと思っています。そこはいくつか期待したいところです。

小栗：師玉さんいかがですか。集落空間の話が出てきました。

師玉：地域住民の方々といういろいろ協力しながら、そういうふうには、今回は川の流域というところで勉強させていただいたので、そこも念頭に置きながらモデルコースを作ったりはしていきたいと思っています。そのときは高梨さんもぜひ協力をお願いします。

小栗：和田さんは、しばらく集落歩きみたいなことを続けていらっしゃいますが、その経験を踏まえて、ガイド育成について何か伝えたいこととかはありませんか。

和田：集落ガイドのほうをするときに、一番困ったのが、集落の歴史的なものが、ほとんど調べても出てこないというのがありまして、やはり、地域の歴史というのは、何かを出発するときにも必要なことがあります。そういう地域の歴史・文化とガイドを組み合わせたようなものができればいいと思って、今、市の集落史づくりというので、今挙がっているので、西仲間で集落史を作ろうという話が出てきていまして、住用村の場合は村史がありません。ですから、調べるときに、災害もあって紛失した部分も多くありまして、なかなか資料が調べにくい点があります。私も鹿児島大学の岡野先生が、聞き書き調査をしたときに、平成 24 年から始めましたけど、そのときの大正 11 年生まれの人から話を聞いたり、そういうものが今、資料として残っていらして、それから、北海道大学の先生方も聞き書き調査にいらして、ずっとつながって 10 年余りその人が作業をしていますので、そういうものを参考にしながら集落史を作って、後輩につないだらどうか、というのが、今年度・来年度に行政と提携しながら一緒に進めていきたいと思っています。

小栗：今、住用の歴史ということが出てきましたけれども、今後のガイド育成の中ではその辺りを

どのように計画されているのでしょうか。

師玉：歴史という部分でも、先ほども和田さんからありましたように、資料がなかったりいろいろありますけれども、中には古い資料を和田さんやほかの地域の方で持っている方が結構いらっしゃると思いますので、それをしっかりまとめた上で、文化だけでなく歴史の部分も集落ガイドの中に入れ込んでいけたらと思っています。

小栗：ありがとうございます。多分、今日のテーマもそうですけれども、歴史についてもそれぞれの人は経験をしている、でも、それがなかなか表に共有できていないというところが、どうこれから取り組んでいくのかということ、多分一つ大事な課題だと思っています。環境省というか国の視点からそういった文化的な掘り起こしというか、歴史的な掘り起こしという観点から、何か協力できそうなことはありますか。

広野：午前中の打ち合わせの中でも、いわゆるインタープリテーション計画という、見えないものをいかに分かりやすく面白く伝えていくかという、そういった計画づくりにこちらでも着手をしまして、歴史文化の内容にいきなり入っていくのはわれわれには難しいですけれども、今日お話があったように、非常に雨が降ることとか、地形がへの字になっている、そういったところから、川が当然生まれて、その川の恵みがさまざまにあって、いろいろな暮らしが成り立って、そこに住用集落が形成をされている。まさに雨が降るところからスタートして最後は住用集落の今残っているような祭祀だったり集落の空間とか、そこにつながるようなストーリー、そういうつながり方がこの地区で見いだせるのであれば、環境省側からも接点を持ち、応援的なことが非常にやりやすいなと、今日あらためて感じました。

小栗：ありがとうございます。残り時間が 10 分ぐらいとなりました。皆さん、フロアからご質問とかありますか。

A：初歩的な質問で申し訳ありません。一番先に聞くべきことだったと思いますけれども、住用地区には住用川それから役勝川、それから川内川という大きな川があって、それぞれ川の上流は世界自然遺産とか国立公園になっていると思いますが、なぜ今回住用川にフォーカスしたのかというのを教えてもらいたいと思います。私は、転勤族で、今、西仲間に住んでいます。住用川と役勝川の合流地点が＜不明＞と聞いています。ということは役勝川も重要で、今、リュウキュウアユは役勝川というふうになっているところを、今回は住用川にフォーカスしたというのをなぜなのか教えてください。

中島：鹿児島大学鹿児島環境研究学の中島です。まず、大きな視点で見ると、なぜ今回住用かと言いますと、歴史的に世界遺産に登録する前に、鹿児島大学の私の前の人たちが、和田さんたちと協力して世界遺産に向けて地域を理解するというこのためにいろいろな取り組みをしてきた場所の 1 カ所が住用地区だったというのが一つあります。それから、世界遺産になって、観光などいろいろな変化が島全体である中で、住用地区については、もう一歩まだ踏み込みが足りていないという話を聞いていまして、何かできないかというのが一つあります。それを踏まえて住用の特徴が何かと考えたときに、高梨さんやいろいろな方のお話を伺う中で、大きな川があることが奄美の中の住用地区の特徴であると思いました。そしてその川の上流は世界遺産の核心部分だと。その世界遺産地域とのつながりから何か考えられるのではないかとというのが一つです。もう一つは、なぜ三つの

川がある中でこの川だったのかというのは、お話をしていく中で、できれば来年役勝川でも同じようなテーマでできないかというのも一つありますが、和田さんたちと話していて、住用川のフヤフヤ汁がとても面白いキーワードだと思ったということがあります。また、どちらが今のタイミングがやりやすいかということを考え、まず住用川からやったらどうだろうかとなったという流れです。よろしいでしょうか。

A : はい。

小栗 : そうしましたら、今日は、冒頭にお伝えしましたように、環境省そして住用の自治体そして地元が、これからどういうふうと一緒に協力できる場所はあるのかというところが出発点でしたので、最後に、皆さんから一言、これからの期待ということで、お願いしたいと思います。どちらから行きましょうか。順番は特に決めずに語りたい方からいきましょう。

師玉 : 今年度から始まっている住用町の地域創生戦略があります。その中で、どうしても、稼ぐ地域づくりというところが、住用地区は弱い地域だと思っています。今回、集落ガイドであったり、加工場の整備や加工品の質を上げるとかものを増やすとか、農林水産物がメインになってくるとは思いますけれども、その中で、地域の方にご協力いただいて、事を増やす、仕事を増やすことによって、子育て世代が引っ越してくる、いろいろなものにつながってくると思います。またいろいろ知恵をいただきながら頑張っていきたいと思っていますので、よろしくお願いします。

島崎 : 今回はありがとうございました。今後は、生ま育ったこの住用町を盛り上げていくために、いろいろなさまざまな取り組みをしたいとは思っているんですけども、行政と一緒に動くことが、どうしても民間で動けないところが多かったりするので、そこは師玉さんに思いっきりアプローチをして、住用と一緒に盛り上げていきたいと思っています。10年計画の中で、変わっていく住用町に期待してください。

和田 : 私は、民泊もしてまして、民泊をする中で、泊まったお客さんを外へ案内したりしています。ガイドの仲間から、住用は 24 時間眠らない島だよとよく言われます。昼間はマングローブでカヌーに乗って、そして、山のほうに散策に行って、そして、名瀬のほうに帰って夕食を済ませて、またナイトツアーに来て、それからまた帰ると、ほとんど地元にお金が落ちない、もったいないということを仲間から言われて、今、町の計画にありますガイド養成で、こういう島で島の人たちが、普段から遊んだりいろいろなところに行っていじちゃん・ばあちゃんや、お父さん・お母さんから聞いていることを、そのままガイドとして話ができる土壌があると思います。そういうのを、今後は若い世代のほうに、やっぱり集落ガイドであったり、住用地域のガイドさんを一緒に養成して、本当に稼げる地域づくりというものにつないでいけたらと思っています。

茂木 : 稼ぐ地域という、現在の市長さんもおっしゃってますけれども、私は、ちょっと違うかもしれませんが、昔あちらこちらで仕事をしていたときに出張に行って、奄美大島の各市町村を回りましたが、ほとんどの町村に行ったときに、自分たちのところには何もないと言います。何もないですとか。行政視察というのがありますけれども、何もないとよくおっしゃいます。何もないよというのは、大型の施設がない、大型の商業施設がないとか、建物がなくて、そういうのをおっしゃっているのだろーと思いましたが、例えば水族館で沖縄の美ら海水族館に対抗しようとしても、それは無理な話で、商業施設で東京・大阪にかなうわけがないわけで、それとは違った価値観

というのが、何もないけどすべてがあるような、それぞれがこちらの島にわれわれも含めて自分たちが住んでいる島をもっと気づいて、いろいろな宝物に気づいて、これもある、これもあると誇りに思えるようなことをそれぞれが考えていくのが一番の根っこだと思っています。

小栗：ありがとうございます。そうしましたら、次はどちらにいきましょうか。

高梨：今日は、お話をさせていただいた中でも、だいぶいろいろなことを言いましたので、もうないですが、ぜひ住用ダムと発電所、あれだけすごいものはなかなかないので、ぜひ世界自然遺産エリアの中にこういうものを、こういうふう自然を使って、こういうふう歴史があったという意味でも、ぜひ指定文化財を目指していただきたいと、そのお手伝いをさせてほしいと思います。ありがとうございました。

久：先ほどの地図が出ていますが、コアな部分と、緩衝地域と、人々が住んでいる地域がセットになっています。昔から、島の人たちは、自分たちの境界域を超えるときに、クチとかタハベ、あるいは唱え言を言うと思います。この地域にはそういうものがなかったのかとか、聞き忘れました。それから、川で遊ぶ場合にも、ここから先は行かないとか、行く場合にはこうしなさいとか、いろいろなことがあると思います。そういうことも高梨さんが言った見えないものの中に入れてもらって、今後また調べていけたらと思っています。それから、先ほど行事に使われる植物で、豊年祭と、茂木さんに教えてもらった正月の話が出ましたが、ほかにもいろいろな行事で使われている植物、あるいは、ほかにも、そのようなことについてももっともっと調べていけたらと思っています。そして、また、遊び事で、そこら辺にあるものを使うわけではなくて、どこか特定の場所から採集してきて使うのか、そういうことについても調べていけたらと思っています。

小栗：広野さん、最後をお願いします。

広野：これまで環境省は、やはり世界遺産地域の話をするときに、いかに価値があるのかというときに、やはりアマミノクロウサギですとか、生き物たちを中心に話をしますし、そういうことが当然話題になります。今日は環境文化ということで、今日の副題にある大川という一つの普段一般の人が聞きなれない川の名前、あえて住用川と言わずに大川と今回は出していますけれども、例えばその大川を通じて、世界遺産地域というものもつなげて語ることができるのではないかと、今日、あらためて思いました。それが、直接環境文化と言わなくても川というつながりの中に、いろいろな営みがあって、自然の恵みを得て、自然を大事に暮らしてこられた地域があってというのは、非常に面白い魅力のあることですし、ここでしかそれを語ることはできないテーマでもあると思います。ただ、一方で、高梨さんからご質問いただいたような、カニの大きさが何でここだけ違うのか、そういうことはまだ分かりませんが、一歩二歩と進めながらそういうことも調べて、面白さをもっと補強することによって、環境文化の面白さというものがまだまだ膨らんでいくのではないかとあらためて思いました。ぜひ、世界遺産というものを語るときにも、自然だけではなく環境文化ということからも、われわれも考えていきたいと思っています。ありがとうございました。

小栗：ありがとうございました。今日は住用の環境文化ということでやりましたが、今回主催している鹿児島環境学は、環境文化というものと確か 10 年ぐらい前にもシンポジウムをやっています。そのときは、まだ環境文化が何なのかというのが、今回紹介できたような内容がなくて、環境文化を足元から探していこうというところで、自分たちで歩いて、そこで人と自然との関わりだとか歴

史や先人たちのつながりを見つけていくということを、重ねてきました。2019年に奄美大島の100人ということで、それぞれの人が自然とどう関わってきたのかということをインタビューをしています。環境文化の面白さでもあり難しさというのは、高梨さんが今回話をしてくださったように、学術的には俯瞰してその地域を見るということはできますけれども、多分一人一人が自然や歴史や文化との関わりや物語を持っているというところです。それが今回少し出てきましたけれども、それをもっと掘り起こして、共有していくというところが、このプロセス自体が、環境文化の国立公園づくりでもあるのかなと思いました。今日議論できたらいいなと思いながらそこまで話は行きませんでした、住用の中で大切にしてきたさまざまな関わりということ、例えば行政とか、あるいは国とか、それを施策に結び付ける結びつき方ということ、今後どう考えていくのかということが1点と、今日は主に島の中というか地域の中の魅力が中心でしたが、ここにもっと外から人が来られるあるいは稼ぐと言ったときに、外から来る人たちが住用に求めてくるものと、住用が伝えたものを、どういう風につないでいくのかということ、今後、考えていくことが必要になってくると思います。今日はまず1回目ということで、まずはこれから一緒に協議を進めていく関係者が一堂に会した場になったと思いますので、ぜひこれをまた次につなげていきたいと思っています。それでは、今日は皆さん、どうもありがとうございました。

中島：小栗先生、どうもありがとうございました。皆さんどうも貴重なお話をたくさんいただきまして、ありがとうございました。皆さまのおかげで、とても和やかで実りのある時間になったと思います。住用の魅力もたくさんみんなで共有できたと思います。ご登壇いただいた方々、皆さんありがとうございました。本日はこれにて終了としたいと思います。ありがとうございました。

【配布資料】

資料

➤ 『環境文化』とは？

奄美群島国立公園の管理運営計画書では、『環境文化』について次のように記載しています。

環境文化

奄美大島では、人の生活圏と森林と海が近接し、人々は自然と密接にかかわりを持ち生活してきました。各シマ（集落）には、この痕跡を見ることができ、現在の暮らしや風習の中にも、古から続く自然とのかかわりを見ることができます。これらの、人と自然の間わりの中で形成された風景や風土を、本管理運営計画では「環境文化」と呼ぶことにします。

集落周辺には神の降り立つ山（神山）や、集落を訪れる海の神が立ち寄る小島（立神（たちがみ）と言われる）、山（森）、島（岩礁）が見られ、多くの集落内には神の通る道や祭祀を行う場があり、これらを中心とした集落構造が今も残されています。また、人々が台風など自然の脅威と折り合いをつけて暮らしてきた名残と言える家屋周辺のサング石垣、ガジュマルなどの樹林にも、島内各地で出会うことができます。集落に面したリーフや河川では、日常的に魚類、貝類、藻類、エビ・カニ類などを採集する風景を見ることができます。また、山中にはかつての生活で利用されていた古道や、耕作地跡、炭窯跡などを見ることができ、島の人々のくらしと自然とのかかわりを想起させてくれます。

奄美群島国立公園奄美大島地域及び他之島地域管理運営計画書 p.6より抜粋



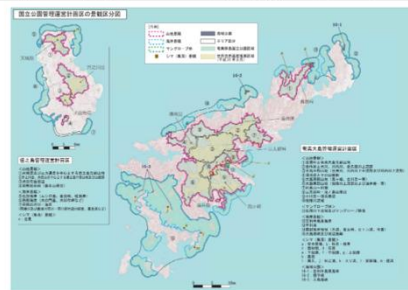
奄美群島の環境文化の例

（左：ショチヨガマ 中央：諸純シバヤ 右：阿佐集落サングの石垣）

➤ 国立公園の主要な景観（魅力）である『シマ（集落）景観』

住居の集落は、世界自然遺産推薦地周辺にある集落として、管理運営計画の中に位置づけられています。

c	西仲間	住居川左岸に位置する。豊年祭等の伝統行事は、神山の麓に位置するミヤで行われる神通やキョコン（川）もあり。集落の人々にとって神聖な場所が多く残されている。旧暦九月九日には現在、奄美大島で唯一のモクズガニ漁の入れが行われている。
d	石原	住居川の左岸に位置し、日本で2番目の規模を誇るマングローブ群落到隣する集落である。イシャグラホ（石原太郎）と呼ばれる怪力の豪傑伝説やユシハラブギンシャ（吉原分限者）と呼ばれる豪傑伝説が残っている。
f	中役勝	役勝川の中流部に位置する。かつては西仲間小学校の役勝分校場が所在していた。水力製材所も1か所に所在しており、ここで加工された木材は、板付舟で集積場のある住居町山間まで運ばれた。
g	上役勝	役勝川の上流にあたる旧県道沿いには、年間を通して自然観察やウォーキングが楽しめる役勝エコロードが所在する。林業が栄えた大正時代には、山仕事や製材等の林業従事者の出稼人が多く訪れ、ハナヌヤンガチ（花の役勝）といわれていた。



【環境省 資料】



環境省
Ministry of the Environment

奄美群島国立公園と世界自然遺産

世界遺産地域の価値と利活用
～森と大川（住居川）の環境文化～

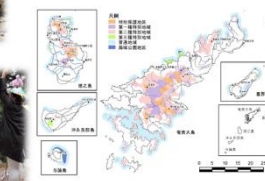
令和7年12月14日
環境省奄美群島国立公園管理事務所



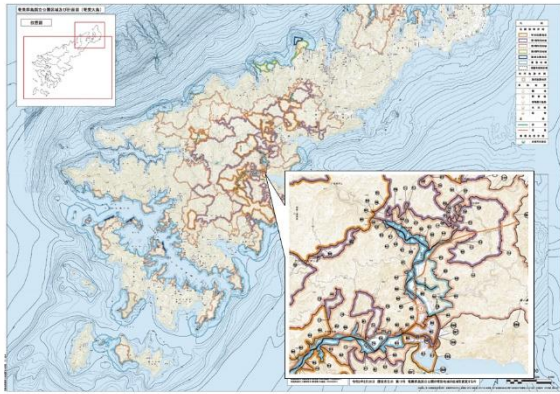




奄美群島国立公園の指定



- 指定：平成29年3月7日（34番目の国立公園）
- 面積（陸域のみ）：42,181ha
- 特徴：豊かで多様な自然環境
固有で希少な動植物からなる生態系
人と自然のかかわりから生まれた文化景観

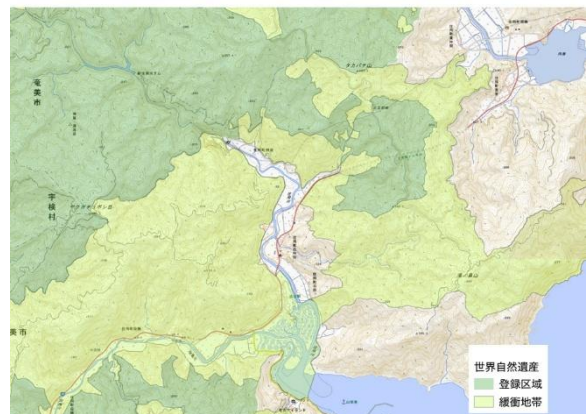


世界自然遺産

- 「奄美大島、徳之島、沖縄島北部及び西表島」
- 登録：2021年7月26日
- 日本の中でも生物多様性が突出して高い地域
- 絶滅危惧種や固有種、独特な進化を遂げた種が多い



4



【奄美市住用総合支所 資料】

住用版地域創生戦略

～世界自然遺産の山河に抱かれ
「人と自然と文化」が息づく
「住んでよし・訪ねてよし」のまちづくり～



『住用未来10年計画』

令和7年3月
奄美市 住用町

住用版地域創生戦略の概要

背景

住用地域においては、住用地域協議会から市に提出された報告書の基本方針

「自然を活用した稼ぐまちづくり」

「災害に強い防災まちづくり」

「定住振興を見据えたまちづくり」

の3つの方針を基に、より具体的な施策を策定するため、住用町地域創生戦略審議会を立ち上げました。

住用版地域創生戦略の概要

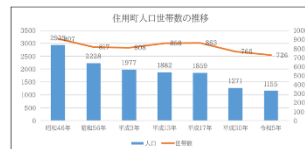
目 的

住用町の人口の現状を分析、地域住民の認識を共有し、今後めざすべき将来の方向と人口の将来展望を提示するものであり、**住用町に特化した効果的な施策を企画立案**する上で重要な基礎と位置付けられることを十分に認識する必要があることから、住用町の人口減少対策に取り組むための方針として、「**住用版地域創生戦略**」を策定します。

住用町総人口の推移

下のグラフは住用町の人口を、昭和46年から令和5年までの住民基本台帳に基づく人口の推移を示したものです。

住用町の推移を分析すると、昭和46年から常に減少傾向にあり、令和5年の人口は1,155人で、昭和46年と比べて、約60%の減少となっています。



①自然を活用した稼ぐまちづくり

豊かな自然を活かした地域資源を活用し、観光産業へ発展させ稼ぐまちづくりを目指す。

現状の課題

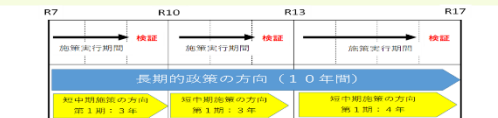
●住用地域の集落には、世界自然遺産に代表される自然資源だけでなく、歴史文化資源が多く現存しているが、その豊かな自然や歴史、文化を活用した観光産業振興策が講じられていない。



住用版地域創生戦略の概要

期 間

令和7年度から**10ヵ年を対象期間**とし、本戦略の策定後も戦略の実効性を確保するために作業部会からなるプラットフォーム準備会を設立し、フォローアップを行いながら3年ごとの見直し、計画・実行・評価・改善を行います。



基 本 目 標

①自然を活用した 稼ぐまちづくり	(1) 地場産品の加工推進・雇用の創出 (2) 休耕地の活用 (3) 集落巡り・ガイド育成 (4) 住用地域の3拠点ゾーンに点在する観光公共施設を活用した観光メニュー (5) 集落史作成
②災害に強い 防災まちづくり	(1) 高齢者・要支援者リストの作成 (2) 要支援者の災害別避難経路の作成 (3) 集落内排水対策
③定住振興を見据えた まちづくり	(1) 町内空き家調査 (2) 地域おこし協力隊との連携 (3) 子育て支援 (4) 学校の再編

①自然を活用した稼ぐまちづくり

取組の方向

1. 地場産品の加工製造促進事業
 - ・加工機材整備
 - ・加工グループの再編
 - ・地場産品開発
 - ・販路拡大
2. 休耕地の活用
 - ・所有者及び相続者の特定
 - ・農地バンクの活用
3. 集落ガイド育成事業
 - ・観光資源の発掘及び人材育成
4. モニュメント及び案内板設置事業
 - ・モニュメントの設置
 - ・案内板の設置
 - ・朝市やフリーマーケットの開催
5. 集落史作成



②災害に強い防災まちづくり

2010年発生の特大大雨災害を教訓に、災害に強い防災まちづくりを目指します。非常時において、住民が迅速かつ安全に対応できるよう自主防災組織での訓練実施や防災意識の啓発、災害弱者への救援支援を行う。

現状の課題

- 住用町内の自主防災組織率は100%であるが、少子高齢化が進み、若者の担い手不足にあることで自主防災組織の活動が十全に発揮できていない。
- 災害時の高齢者独居世帯の見守りなど、地域で支え合う体制や有事の際での要支援者の避難等の支援が確立されていない。



②災害に強い防災まちづくり

取組の方向

1. 各集落の要支援者の実態把握
2. 要支援者名簿の作成
3. 個別避難計画の策定
4. ハザードマップの更新
5. デジタルハザードマップの作成
6. 「防災士」の取得助成
7. 定期的な自主防災の訓練
8. 備蓄用品や資材の見直し



③定住振興を見据えたまちづくり

住用町は国勢調査の人口で、昭和30年には、4,133人の人口に対し、平成17年には、1,784人、令和2年の国勢調査では、1,188人と約3,000人の人口が減少している。

現状の課題

- 若者の地元流出が、少子高齢化の問題を進展させ産業の衰退や学校存続など地域の活力低下を招き、様々な分野の問題へと進展させている。



③定住振興を見据えたまちづくり

取組の方向

1. 空家対策における地域おこし協力隊との連携
 - ・空家情報の把握
 - ・貸主及び借主との相談斡旋
 - ・空き家実態調査事業
 - ・空き家啓発事業
 - ・危険空家等除去助成
 - ・財産管理制度活用助成金
2. 民泊民宿開業支援事業
 - ・民泊・民宿の推進
 - ・お試し体験宿泊
3. 認定こども園の開園
4. 子育て支援
5. 学校の再編
6. 小水力発電事業導入検討
 - ・可能性調査の導入
 - ・候補地の選定施工



みんなでつくるまちづくり

「住用版地域創生戦略」の策定にあたっては、嘱託員 地域協議会と連携を図りながら 各種団体や有識者からなる地域創生戦略審議会を設置し、「※産・官・学・金・労・言」の幅広い知見も取り入れながら検討を行いました。

※「産・官・学・金・労・言」とは産業界、市や県・国の行政機関、教育機関、金融機関、労働団体、メディアを指します。

本戦略の策定後も戦略の実効性を確保するために引き続き 前述の地域創生戦略審議会を中心に フォローアップ作業を行い PDCAサイクルにより計画・実行・評価・改善を行います。

町民が主役です！！

みんなで、

「人と自然と文化」が息づく

「住んでよし・訪ねてよし」のまちづくりを目指しましょう！



**地域の方々と一緒にカニ料理
フヤフヤ汁を作ってみよう！**

西仲間石原老人クラブ
和田美智子





【講演会 資料】

2025年 **12月14日(日)** 〔主催〕：鹿児島大学鹿児島環境学研究会
〔共催〕：環境省奄美群島国立公園管理事務所
〔後援〕：奄美市

令和7年度奄美大島における「環境文化」活用促進等業務

世界遺産地域の麓の価値と利活用
ー森と大川(住用川)の環境文化ー

住用川流域の環境文化景観
ー流域環境の特徴と暮らしの様子ー

高梨 修
(大和府教育委員会(環境文化)学芸員、元奄美市立奄美博物館館長)



1 「環境文化」とは何か

「環境文化」の定義

環境省那覇自然環境事務所
第3回奄美地域の自然資源の保全・活用に関する検討会について(平成20年(2008年)11月17日)
『奄美地域の自然資源の保全・活用に関する基本的な考え方(案)』14～15ページ

(環境文化型国立公園)
国立公園として指定することになる奄美地域の森や川、浜などの自然資源は、人々の暮らし、営みなど、文化と深く関わりを持ってきました。その関わりそのものが資源ということができます。その全体を理解し守っていく意識が重要です。それらを紹介していくことにより、国立公園の魅力は増大し、利用者を引きつけることにもなります。奄美地域の自然と文化を住民と利用者がともに楽しみ、ともに守る国立公園を目指します。

また、奄美地域の島々がそれぞれ少しずつ異なる多様な文化を持つことも、魅力の一つです。この「文化」は、人々の暮らし、営みの中に生まれた民俗、習慣、意識、価値観などが中心であることも特徴です。

※ 環境文化とは

ここでは、固有の自然環境の中、歴史的につくり上げられてきた自然と人間のかかわりの過程と結果の総体、つまり、島の人々が島の自然とかわり、相互に影響を加え合いながら形成、獲得してきた意識及び生活・生産様式の総体である。屋久島環境文化村構想(鹿児島県)で提唱された。

●平成29年(2017)3月7日、奄美群島が国立公園に正式に指定され、あらためて「環境文化型国立公園」という保全・活用の考え方が示された。しかし、「環境文化」という用語は環境＝自然と狭小に理解され、「人と自然のかかわり」の部分だけが切り取られたステレオタイプな理解論が流通してきている。

●元奄美市市長(住用河内仲間)は、「環境文化」を「その土地の暮らしの歴史」と表現し、時間軸を入れた暮らしへの接近の重要性を指摘する。

環境省那覇自然環境事務所
第3回奄美地域の自然資源の保全・活用に関する検討会について(平成20年(2008年)11月17日)
議事録3ページ

○委員：「生態系管理型」と「環境文化型」の2本柱の新しい国立公園ということは分かるが、まだ、具体的に分かりづらい部分がある。環境文化型の国立公園は、そこに住んでいる人の顔が見える公園と捉えることができ、素晴らしい国立公園であると考えられる。

①そこで、もう少し具体的に、環境文化型国立公園になると、そこに住んでいる人達にとってどこが、どう変わるのかを示す必要がある。

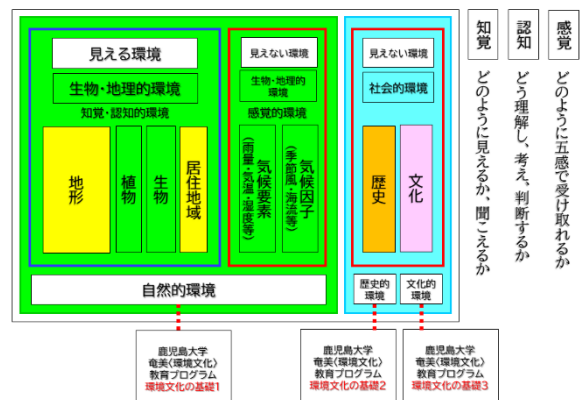
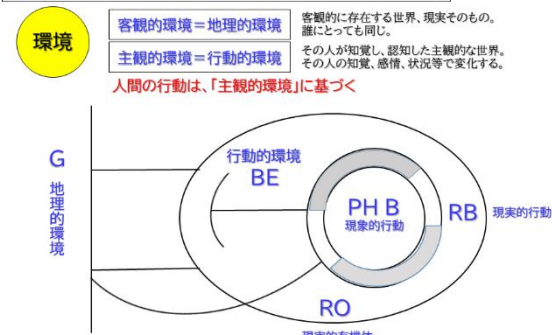
②国立公園の文化の概念に、住んでいる人達の営みを組み込むということは具体的にどういことが分かれれば良い。もう少し具体的なことが分かれれば理解もしやすいし、賛同もしやすいのではないかと。

③また、外から来る人達に対して環境文化型の国立公園のポイントや他の公園との違いが分かると良い。

ただし、その際に来訪者に地域のタブーなどを理解して頂かないと、環境文化を前面に出すマイナス面が大きくなることに留意する必要がある。また、奄美地域にはハブが生息していることもあり、個人で行動すると他の地域と異なり危険性が高いこともあるため、ガイドの育成も必要と考えられる。また、来訪者には、そういったことも知った上で来て頂きたい。

「環境文化」の論点①：環境について

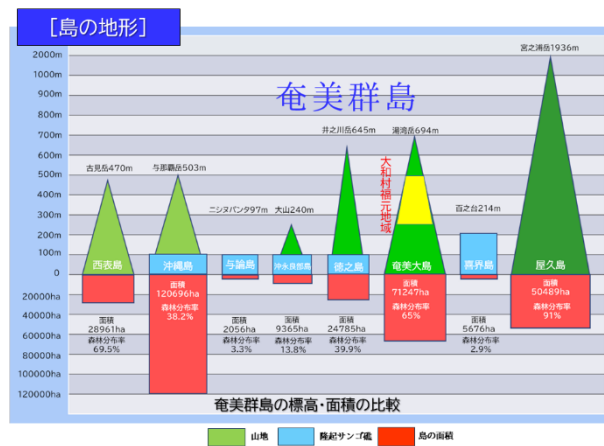
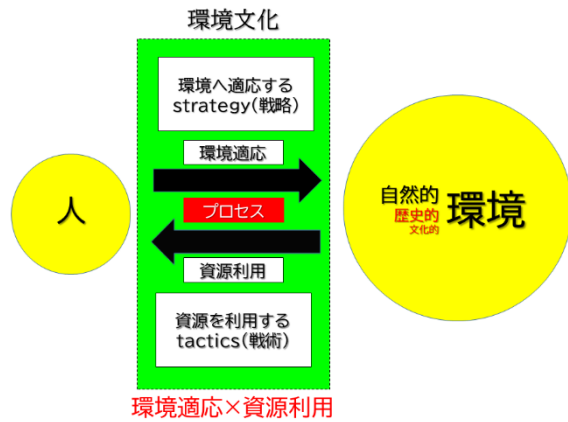
ゲシュタルト心理学のKurt Koffkaによる「環境」の定義(1935年)



「環境文化」の論点②:文化について

	生活文化・暮らし	民俗文化
時間	現代を含む変動的な文化	過去から続く伝統的な文化
継承	特に重視しない	伝承を重視する
対象	広い(都市部・若年層も含む)	地域社会・集団が中心
定義	意識及び生活・行動様式の総体	特定の地域・集団に口承・慣習で伝えられてきた営みの総体
英訳	(Way of Life) (Terroir)	Folklore
	環境文化	伝承文化

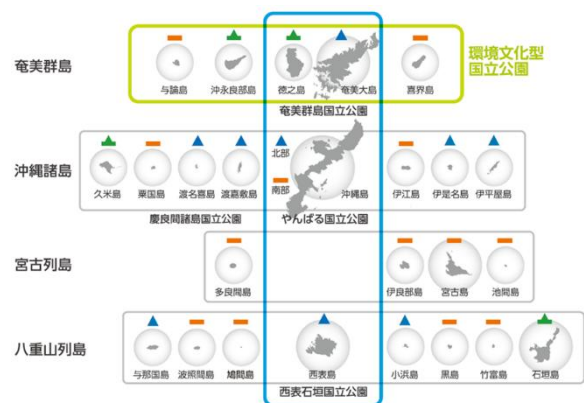
「環境文化」は民俗文化に限定されるものではない



	喜界島	奄美大島 加計呂麻島 請島・与路島	徳之島	沖永良部島	与論島
基盤となる 主要地質	琉球石灰岩	堆積岩・火成岩	琉球石灰岩 堆積岩・火成岩	琉球石灰岩 堆積岩・火成岩	琉球石灰岩
地形の主要 構成要素	台地 地下水系	山地 河川水系	山地>台地 河川水系	山地<台地 地下水系	台地 地下水系
集落の 主要立地	隆起サンゴ礁 の段丘上	沖積平野上	隆起サンゴ礁 の段丘上	隆起サンゴ礁 の段丘上	隆起サンゴ礁 の段丘上
島の分類 (奄美博物館案)	台地の島	山の島	山と 台地の島	台地と 山の島	台地の島
島の分類 (従来学説)	低い島	高い島	高い島	低い島	低い島

奄美大島は奄美群島で「異質」な島という理解がほとんどない

奄美群島 ~~×~~ 奄美大島 (= 奄美市)



南西諸島における国立公園・世界自然遺産と島嶼の地形的分類
出典: 奄美市立奄美博物館編『博物館が語る奄美の自然・歴史・文化』(2021年・南方新社)より

「奄美大島の山地」

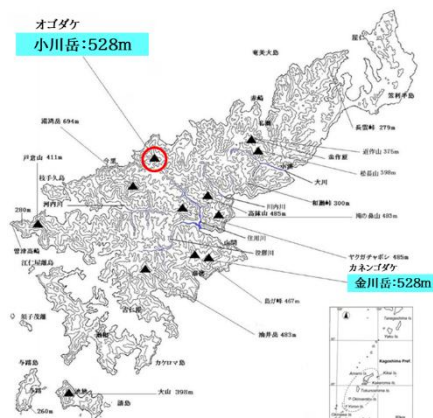
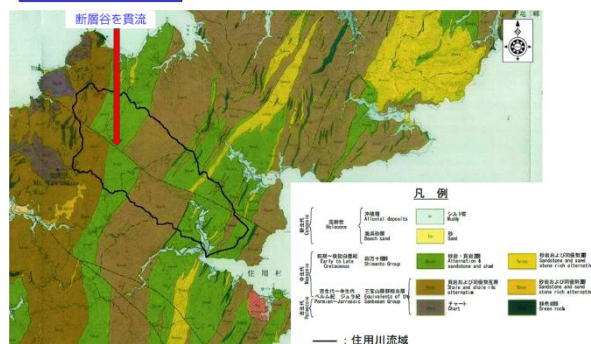


図1 奄美大島および近隣の6 島、主要な山岳、河川を示した。

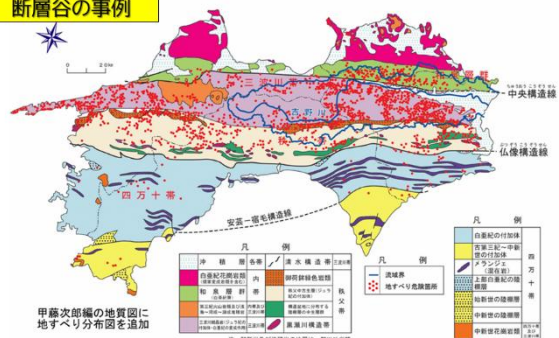
「住用川の分水嶺」



「河川流路」



断層谷の事例



※甲藤次郎編の地質図に地すべり分布図を加える。

図-1.1.4 吉野川流域の地質

[中央山脈と地勢]

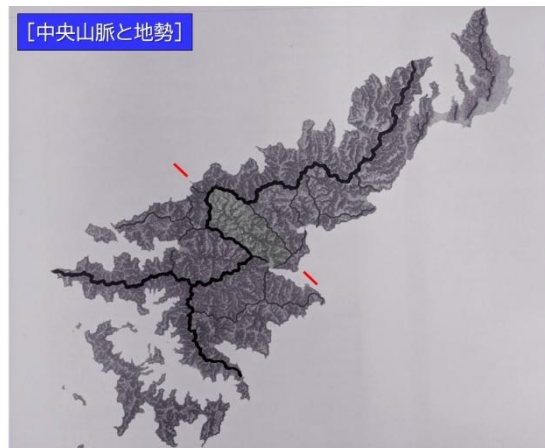
傾斜量地図

傾斜が平らになるほど白色で表示される



住用川上流の標高250～500m付近には広い平坦地が広がり、そこから広大な南東向きの緩斜面に続く地形を呈している。こうした起伏が緩やかな地形は、いわゆる「準平原」的地形的特徴として理解されている。当該地域一帯の起伏の緩やかな地形は、奄美大島で最大規模を誇る住用川系河川の水源涵養地となっている。

[中央山脈と地勢]



住用川は、奄美大島の西側に偏在的に位置している山脈の山頂近い場所に源流を発する。その源流域が大和村福元地域であり、東南向きの広大な斜面地である。そのために日照時間が長いという重要な特徴がある。ただし、降雨が多いため、実質的な日照量については判然としない部分がある。

西側にあるのに東向き斜面の濃い土地

福元(高原)は日照時間が長い

大和村福元のタンカン農家・大海昌氏は言う！

福元地域

大和村

奄美大島

住用町

西北

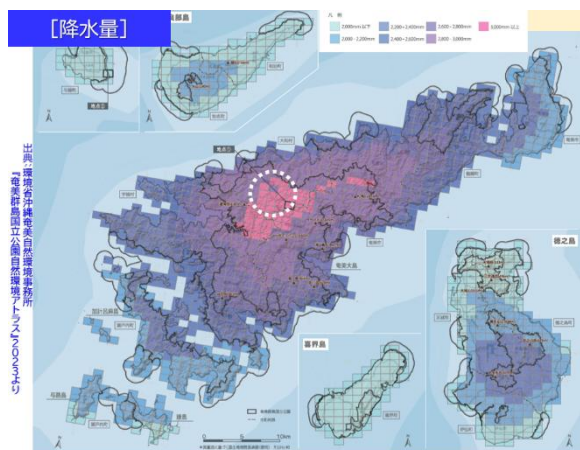
茂木幸生氏は奄美大島の地形は



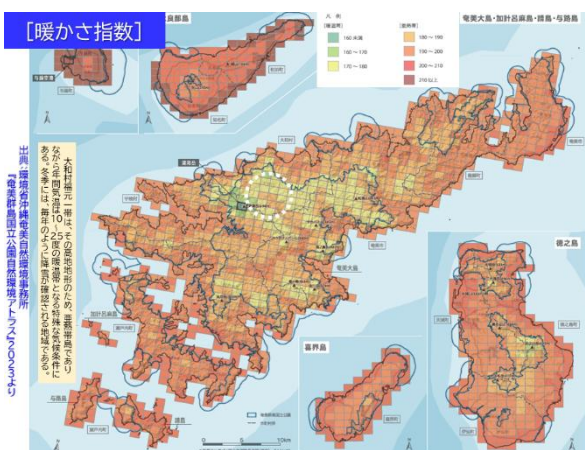
の字だと言う！

タンカン農家の実用知士看知
西仲間の実用知士看知

[降水量]



[暖かさ指数]



[植物分布]

ミヤビカンアオイの分布

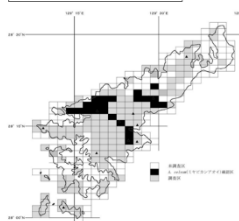


図12 ミヤビカンアオイ *A. celsum* の分布。

フジノカンアオイの分布

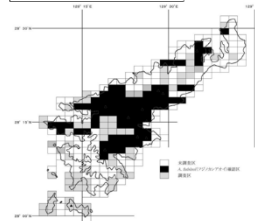


図13 フジノカンアオイ *A. rubra* の分布。

オオバカンアオイの分布

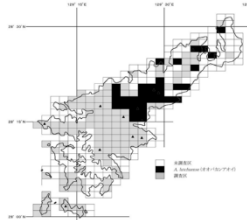


図 15 オオバカンアオイ *A. latifolium* の分布。

グスクカンアオイの分布

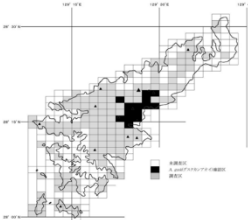


図 14 グスクカンアオイ *A. guski* の分布。

カケロマカンアオイの分布

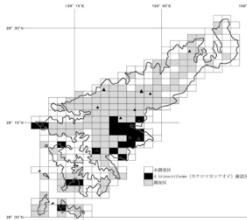


図 17 カケロマカンアオイ *A. trimeriforme* の分布。

トリガミカンアオイの分布

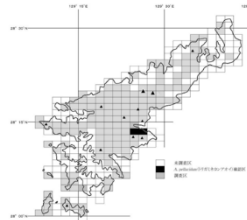


図 16 トリガミカンアオイ *A. pellucidum* の分布。

住用川左岸域を中心に分布

住用川右岸域を中心に分布

住用川の流域環境まとめ(暫定版)

- ① 住用川の源流域は、奄美大島西側の「小川岳」の山頂に近い斜面地にある
- ② 住用川は奄美大島を横断するほどの長い流域を持つ
- ③ 住用川の流路の大部分は「断層谷」に当たる
- ④ 住用川流域は広大な東南向き裾鉢状の斜面地である(日照時間が長い)
- ⑤ 住用川の河川勾配は流路が長いいため緩やかである
- ⑥ 住用川の源流域は奄美大島で最も降水量が多い地域である(大和村の雨は住用町に流れてくる)
- ⑦ 住用川の源流域は奄美大島で最も冷涼な気候の地域である

住用川セブン(仮称)

3 住用川流域の環境文化景観



住用川流域の環境文化景観

	住用川上流域	住用川中流域	住用川下流域
対象流域	旧ダムから上流域	発電所から柳橋まで	柳橋から下流域
地域呼称	ジョンコ(上川) フクモト	ウーコ	
見える環境	●山頂に広がる平坦地 ●ジョンコ降り 雨は殆ど住用川に流れ込む	●幅が狭まる谷地形 ●汽水域(海水流入域)	●沼原 ●汽水域(海水流入域) ●干潟 ●マングローブ群落
見えない環境	●降水量 ●気温	●河川勾配	
環境適応 (strategy)	●平坦地に集落を形成 ●平坦地で農耕を営む	●沖積地に集落を形成 ●河川流域で生業を営む	●沖積地に集落を形成 ●河川流域で生業を営む
資源利用 (tactics)	●土地 ●気候(雨・気温・霧)	●木材、●シイの実 ●コーガン(モクズガニ) ●ヤジ(リュウキュウアユ)	●土地、●木材、●シイの実 ●コーガン(モクズガニ) ●ガサム(ノコギリガザミ) ●シレンジミ

※ 茂木幸生氏の聞き取りに基づいて構成

住用川中流域の森林資源を利用した林業

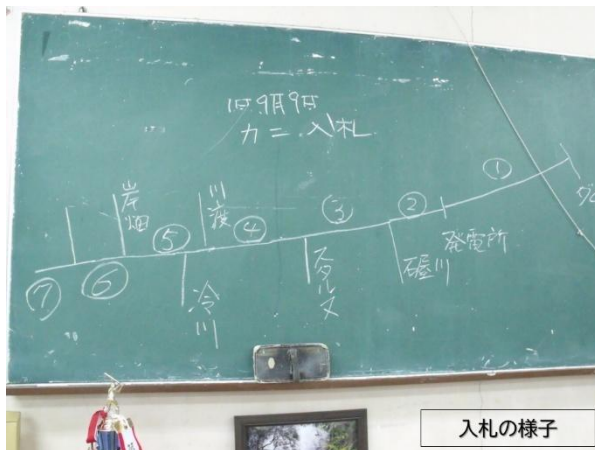
鉄道の枕木 = 英語: railway sleeper
米語: cross tie

林業従事者は、枕木のことを「スリッパ」と呼んでいた。
「sleeper」に由来する呼称であることがわかる。
明治期の鉄道政策はイギリスの御雇外国人に全面的に依存しており、黎明期から奄美大島から枕木が搬出されていたことがうかがえる。
伐採後、山中でハツリ(マサカリ斧)を用いて製材までしていた。

輸出先	内地(国内)	外地(国外)
枕木の種類	狭軌枕木	広軌枕木
樹種	シイ	樹種を問わず
規格	長さ: 7尺5寸 (2m25cm) 幅: 7寸5分 (22.5cm) 厚さ: 4寸5分 (13.5cm)	長さ: 7尺5寸 (2m25cm) 幅: 7寸5分 (22.5cm) 厚さ: 4寸5分 (13.5cm)
伐採していた時代	明治時代～昭和30年代頃	明治時代～昭和30年代頃
可能性ある鉄道	※黎明期(明治前期)の官設鉄道 イギリス式枕木等の使用あり ※大正～昭和初期の軽便鉄道	※満州鉄道

※ 茂木幸生氏の聞き取りに基づいて構成

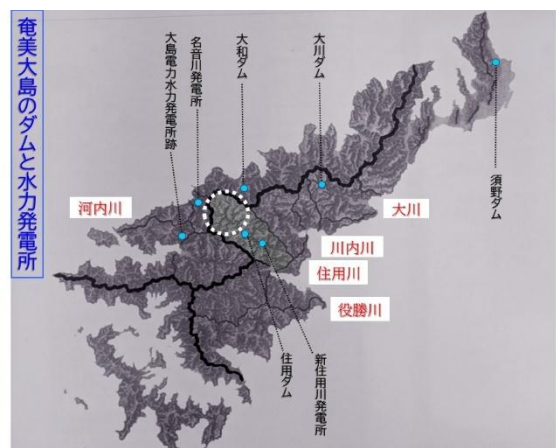
モクズガニ漁



蟹漁(モクズガニ漁)の入札制度 かつて川内川でも行われていたが、現在では住用川だけに残る貴重な文化遺産		
	西仲間集落のカニ漁	ローカルコモンズ (地域資源の共同管理・利用)
ルール	漁場の利用権を市場原理(入札)で配分	外部からの参入を防ぎ、資源の濫用を避けるための排除の仕組みがある
利用者	西仲間集落住民のみ	特定の地域住民に限られる
資源管理	個人の自主管理	利益に配慮しながら共同で決定、管理
社会的役割	●集落権益(集落費)の獲得 ●漁業権の管理 ●信頼の醸成 ●知識・技術の継承 ●生態系の維持	①資源管理 ②社会関係の構築 ③生活の安定

シマウタ「蟹よ蟹よ、住用ぬ蟹よ」
(蟹といえは住用の蟹だ(一番だ))

住用川に生息するモクズガニは他地域と差異化できるのでは？
河川勾配・年間水量等に由来する餌・移動等の生息環境が違う



奄美大島に近代産業革命をもたらした住用川

奄美大島の電化事業

明治44年(1911年)、名瀬村の電気事業が嚆矢、南西諸島で最も古い

「大島電気株式会社」

早稲田大学商学科を卒業した青年実業家・**林 為良**(徳之島花徳出身)
名瀬の有力者から資金を集めて設立
大正6年(1917年)、林為良、34歳で国会議員当選(鹿児島県最年少の国会議員)

大島電気は本格的な水力発電事業を計画

当時、全国各地で水力発電事業を手がけていた「**川北電気企業社**」に委託
(パナソニックの前身企業の一つ)

水量が安定している**住用川**、その**中流域の狭い谷地が建設適地**に選ばれる
大正7年(1918年)3月、住用川発電所・ダム、起工

大正8年(1919年)9月、住用川発電所・ダム、竣工

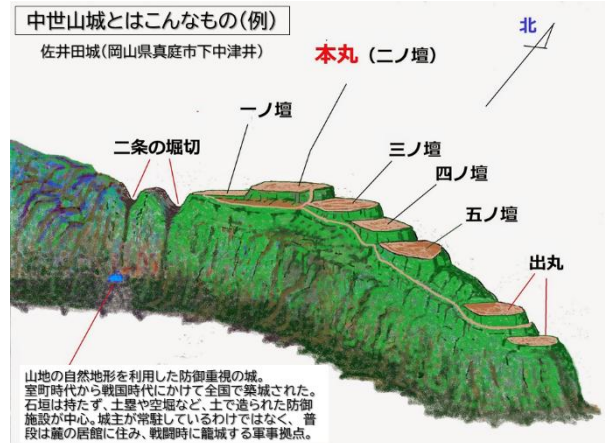
世界自然遺産登録地の中心となる住用地区の特徴である豊かな河川は、
近代的なインフラ整備をもたらす原動力になった。
昭和34年に新発電所・ダムが建設されるまで、約40年間稼働を続けた。
奄美大島の電化事業は、日本全国の電化事業の普及に先駆けて進められた。
ダム・発電所・送電線電柱がセットで良好な状態で残されている



住用川中流域にある「住用川発電所」の建設記念碑

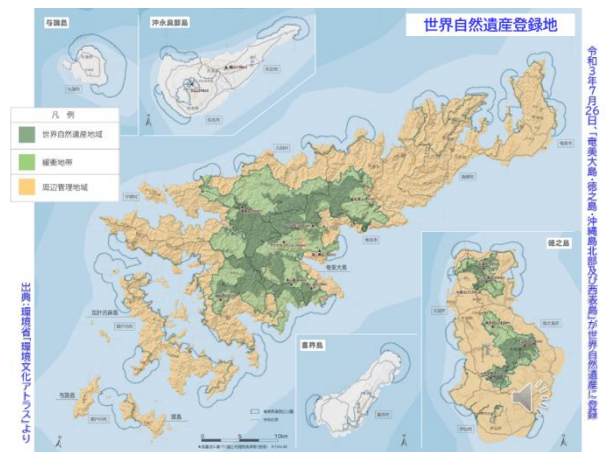
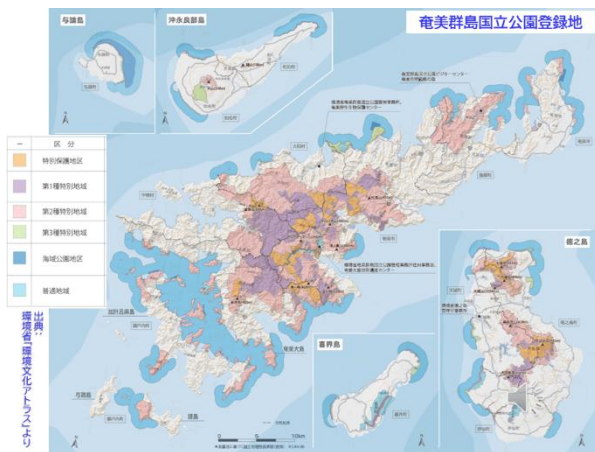
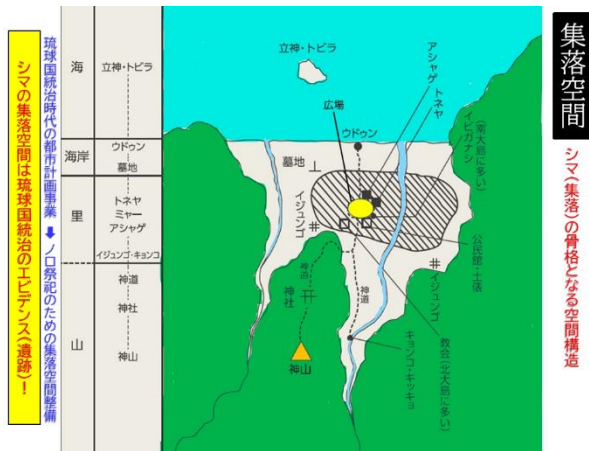


住用川河口域に分布する中世山城(城跡)



4 西仲間集落の環境文化景観





環境省那覇自然環境事務所 第3回奄美地域の自然資源の保全・活用に関する検討会について:平成20年(2008年)11月17日 議事録3ページ
①そこで、もう少し具体的に、環境文化型国立公園になると、そこに住んでいる人達にとってどこが、どう変わるのかを示す必要がある。
環境文化型国立公園がある地域に暮らしている人たちの「環境」の、「地域」の理解について解像度があるようになる。外部の人たちがその地域の暮らしに高い関心を示すようになる。暮らしや地域資源に対する理解が深まるので、意識、教育、産業、観光、行政、福祉等のよい展開が期待できる。環境文化の理解は、地域の暮らしを豊かにして、住民のウェルビーイングを高めていく。ウェルビーイングの向上なくして地域の特長的発展はない。
②国立公園の文化の概念に、住んでいる人達の営みを組み込むということは具体的にどういうことが分ければ良い。もう少し具体的なことが分ければ理解もしやすいし、賛同もしやすいのではないかな。
国立公園の周辺に暮らす人たちが、地域の環境へどのように適応してきたのか、そのstrategy(戦略=計画性・方向性)がわかるように、そして、どのような資源を利用してきたのか、そのtactics(戦術=具体的手段)がわかるようになること。暮らしの解像度があり、環境に対する循環的理解も深まる。
③また、外から来る人達に対して環境文化型の国立公園のポイントや他の公園との違いが分かると良い。
そこに暮らしている人たちの環境適応、資源利用の様子を理解するところから国立公園がある地域全体の解像度をあげることができる。「人が利用する環境」という視点が加わることで、自然公園をより立体的に、環境のスケール感をあげて循環的理解ができるようになる。
高梨の私見

付録：イベント打合せ議事録

(本記録集には環境文化に関する内容のみ抜粋)

- ・ 日 時：令和7年10月17日（金）
- ・ 場 所：奄美市住用総合支所（奄美市）
- ・ 参加者：山下隆光氏、和田美智子氏、茂木幸生氏、久伸博氏
高梨修氏、濱田政信氏、島崎仁志氏（コアメンバー）
奄美市住用総合支所師玉産業振興係長、岡主査
環境省広野所長、境田管理官、興津管理官
鹿児島大学中島慶次特任教授、池田事務補佐員
- ・ 内 容：体験活動、座談会の詳細について（プログラム内容等）

広野：皆さまこんばんは。あらためまして、環境省の奄美群島国立公園管理事務所の広野と申します。普段は大和村の保護センターに勤務していることが多いですが、遺産センターでもお世話になっています。今日は大変遅い時間、夕食時にお集まりいただきましてありがとうございます。今回のご相談の趣旨について軽くお話しします。



まず、奄美群島国立公園は、今からちょうど8年前の2017年に国立公園に指定をされまして、そこから4年後の2021年に世界遺産に登録されたという大きな流れがあります。国立公園のテーマとしましては大きく二つありまして、まずは世界遺産になる豊かな自然環境、生物の多様性を有する島ということで、生態系をしっかりと管理していく生態系管理型の国立公園というのが一つの柱でした。もう一方の柱が、今日の話のテーマになっています環境文化と呼ばれる、いわゆるこれまで島の中で、さまざまな人の活動が自然とともに育まれてきたというところの、歴史文化をしっかりと踏まえた国立公園であるべきというのがもう一方の柱でした。

国立公園に指定をされたあと、2018年から2020年にかけて、3～4年の間に、これまで龍郷町の秋名集落ですとか大和村などとか、いくつかの地域で環境文化をテーマにしたシンポジウムを開催してきて、今日、お手元にもそのときの報告書をご参考にお配りしています。これまでも、何度か国立公園の大事な要素として環境文化を地域の皆さまと考えようという取り組みがなされてきましたが、そこからまた遺産登録になって、さまざまなマングース対策など野生動物関係の仕事をたくさん抱えている中、環境文化のほうになかなか足をしっかりと踏み入れて取り組みを継続することがわれわれもできていなかったという反省もあります。今回、あらためて、これまでのさまざまな取り組みを国立公園の中でも深く取り組んでこられている住用地区で、今年度のイベントを皮切りにして、もう一度地に足を付けた形での環境文化というものをしっかりと考えたいと考えています。

今年度の中身については、鹿児島大学の中島さんのほうからご説明をいただきますけれども、春以降、鹿児島大学の中島さんと、今日はお二方いらっしゃっていただいている住用支所ともご相談をしながら、今年度できる企画内容を考えてきました。実は、今年度実施をする日程や、ある程度

の中身はこちらで事前に検討し、考えてきているところですが、それが果たしてどのように開催できるのか、具体的なところについては、まだまだ詰まっていない状況です。今日、こういった形でお時間をいただいて、より実りのあるイベントになるようにお知恵をいただきたいと思っています。簡単ですが、以上です。

興津：皆さん、こんばんは。環境省の興津です。先週皆さんにお電話を差し上げて、すごく急なお願いだったのですが、お時間をつくっていただいて、どうもありがとうございます。私は普段、住用の世界遺産センターに勤務してまして、国立公園の管理や、住用の三太郎線におけるナイトツアーの利用ルールづくりの担当をしています。ナイトツアーのルールづくりと話し合いを重ねていく中で、住用にはナイトツアーや、ほかにもいろいろ魅力的なアクティビティーがあるにもかかわらず、それがなかなか地域振興とか地域経済にいい影響を与えるところまでつながっていないということを課題に感じているところです。今回はナイトツアーでなくて、環境文化というところですけども、環境文化で住用の魅力をあらためて見直して、それを地域発展・地域振興につなげていくということを少しお手伝いできればいいなと思っているところです。今日はよろしくお願いします。

皆さん、お知り合い同士だとは思いますが、良かったら、一人一人自己紹介をしていただきたいと思います。最初は中島さんと池田さんから順番にお願いします。

中島：こんばんは。本日はお時間をいただきまして、ありがとうございます。鹿児島大学の鹿児島環境学を担当している中島と申します。先ほど個別にご挨拶はしましたが、2011年、2012年ぐらいに、岡野という者が環境省から鹿児島大学に行っていて、先ほど広野所長がお話をされた環境文化の島全体のイベントの前にいろいろ調査だとか国立公園の指定の際に、環境文化というキーワードを＜不明＞に取り組むことに向けた調査をしていたということです。私も環境省から鹿児島大学に派遣されている形になりまして、継続した取り組みをしているということです。その中で、いろいろ過去の資料を見ていたり、国立公園なり地域のいろいろな方にお話を伺い、住用支所で進めている地域戦略を見ている中で、環境文化を一つのキーワードとして地域振興していくという中で、国立公園の視点から見ると、そちらのほうの取り組みが、先ほど広野所長もおっしゃったように、少し距離が置かれてしまっていました。ただ重要なキーワードであることは変わりがないと理解しています。そういった中で私は何をして行こうかなと、小栗先生とか、高梨さんに、濱田さんからも話がありましたけれども、いろいろお話を伺っている中で、高梨さんが、昔、地域の川とか森林の利用や集落のことを調べられていた時期があったけれども、その成果をうまく還元できていない、うまくまとめができないという話を聞きました。そういったものをうまく活用しつつ、地域の人たちと情報を共有するという形でイベントができればいいなというので、高梨さん、小栗さんと相談しつつ企画を考えて、環境省側にこんなのはどうですかと投げたという経緯になります。今回はよろしくお願いします。長くて申し訳ありません。

池田：皆さんこんばんは。鹿児島大学鹿児島環境科学の事務をしております池田と申します。よろしくお願いします。私は鹿児島の出身でありながらも、奄美へはあまり訪れたことはなく、今日で3回目ですけども、皆さんのお話を聞きながら、奄美のことをもっともっと知れたらいいなと思っています。どうかよろしくお願いします。

和田：こんばんは。西仲間出身の和田美智子です。よろしくお願いします。私は、やむらランドを立ち上げたときに、地域にお金の落ちる仕組みづくりに取り組んだけれども、なかなかそこが思う

ように効かなくて、あとはどうしたらいいかということで、話し合いをしました。それから、住用は 24 時間眠らない島だというふうに言われているけれども、なぜ住用の人たちがそこに関わっていないのかということ、よくガイドさんに言われまして、そのときに、マングローブパークに昼間来て、夜はナイトツアーで来て、本当に住用を行ったり来たりする人口は多いけれども、足を止めることがない通過点にしかになっていないので、それを止めるには何をすればいいかということで、民泊を 5 名で始めました。5 名の予定でしたが、4 名になって、今現在 3 名でやっています。民泊の中で、私自身もナイトツアーをしたり、それから、島の西仲間地域を主にしていますけれども、やはりダム線に行ったりとか、発電所の方面、それから三太郎峠を散策したりとかしています。それでも、なかなか人数が増えないという取り組みをどう広げていけばいいのか、とても魅力がある地域だけでも、その魅力を感じて、みんなに広めていく方法が、今できていないのが、大きな課題として考えています。これを若い人たちに伝えて広げていって、稼げる地域づくり、自分たちで考えて自分たちでこの地域を利用して自分たちで稼いでいける、そういう仕組みづくりを今後の大きな課題ではないかと思っていますので、よろしくお願いします。

山下：この集落のすぐ隣の石原というところの、山下と言います。よろしくお願いします。現在は農業を主にやっていますけれども、川や山のことに非常に興味があって、普段は川へ行ったり山へ行ったりしてよく楽しんでます。今日はいろいろな話が出るとお思いますので、非常に勉強になると思います。よろしくお願いします。

島崎：こんばんは。この中で一番若い、若く見える島崎です。よろしくお願いします。実家は神屋のほうにあって、神屋の人口は何人かと言われると 1 人しかいません。普段は、今、世界遺産センターの中にあるショップを運営したり、住用町のうちみバンガローの指定管理施設の運営に携わっています。幼少期からいろいろ自然と遊んではいます。ここにいらっしゃる皆さんは、先輩方というよりは、どちらかといえば父母に近い方たちなので、いろいろな話ができて、また昔の感情を取り戻しながら、いろいろ提案していきたいとお思いますので、よろしくお願いします。

濱田：合同会社地域計画あまみの濱田です。電話で 10 日ぐらい前に興津さんから電話をいただいて、みんなで意見交換みたいなことをするので来ていただければと呼ばれました。趣旨というか、中身をお聞きしたときに、住用の地元の方がたくさん来られて、いろいろな意見交換をする場になるのかなという気がしたので、私は来ていいのかな、ちょっと違うのではと思いました。電話でいろいろお聞きしていたら、何か自分なりに思うところを皆さんと意見交換ができれば、今後、住用の皆さんと関わっていくときに、勉強になると思って、今日来ました。私は 2022 年に奄美市で第 1 回の官民戦略会議でしたか、世界遺産を活用した意見交換会になるようなもので、今、通称プラットフォームとして第 3 回まで開催しているものの、第 1 回のときに参加させていただきました。仕事は造園業をやっているとして、設計施工をランドスケープをテーマに、風景をつくることを頭に置きながらやっています。プラットフォームのところで、サイン計画を提案しまして、その会議自体が世界自然遺産を活用するというテーマでしたので、この住用の世界自然遺産と隣接したこの地域で、いかに交流人口を増やすには、それから人を呼ぶにはどうしたらいいかという、一つの切り口としてプレゼンしたのがきっかけで、そこから 3 年、4 年とずっと住用の皆さんにお話を伺ったり、会話をさせてもらって、今、水面下で邪魔と思われるのか、評判がいいのかよく分かりませんが、それでも住用に足繁く通っている状態です。今日も来ました。よろしくお願いします。

境田：こんばんは。環境省の境田と申します。国立公園利用担当ということで、3 年前から環境省

に籍を置いています。その前は、4 階にずっといまして、観光案内所にて、生物の多様性とは何というお客さんからの質問、そういったことを受けて、なかなか正確に答えられないといいますが、固有種が多くて希少種もたくさんいるのが多様性じゃないかみたいな、その中に人も入るみたいな、いい加減な答えしかできないぐらいの知識しかありませんでした。環境省に入って、国立公園の特徴でもあり、魅力でもある環境文化、そして世界遺産に登録された価値、そういったものをみんなで共有することが大事ではないかと思って、インタープリテーション計画を作るのが今年度の業務で、取り掛かっています。今日お集まりの皆さまに意見を聞きながら、みんなで奄美の良さを伝える物語集的なものができて、みんなが共有して、生物の多様性とは何と聞かれたときには、こういったことだと話せるような状況に持っていければいいのではないかと思います。また皆さま方と環境文化のことも含めて意見交換、また教えていただければと思います。よろしくお願いします。

茂木：皆さん、こんばんは。西仲間の茂木幸生と申します。興津さんから、2 週間ぐらい前に連絡をいただいて、何のことだろうかと思いましたが、環境文化がいろいろということで、支所から名前が挙がったということでした。住用町役場に採用されまして、それから合併して奄美市になりましたけれども、31 年と再任用の 3 年間を含め、プラス 3 年で退職し、退職してから 5～6 年になります。職員時代に手掛けた住用村史を、人々の生活の移り変わりがそもそも歴史ではないかというコンセプトで作って、いい仕事に携わることができたと思っています。当時はいろいろと反対のご意見もありましたけれども、何とかまとめることが良かったと、編集の担当者としては、自分の職員生活の中で、一番いい仕事ができたと感じているところです。今、農業をやりながら、資金稼ぎの勤めもやりながら、そして、農業委員を拝命をしまして、二つも三つもやっています。自分の趣味の民謡で、日本民謡協会の奄美連合会の中に名瀬支部というのがありまして、その支部長も仰せつかりまして、いろいろと結構な忙しさです。今日は、皆さまのいろいろなご意見も伺いたいと思いますのでよろしくお願いします。

久：皆さん、こんばんは。元奄美博物館に勤めていました、久と申します。先日はお電話をいただき、ありがとうございます。私に何ができるかなと思っていますところですが、博物館では主に伝統行事とか民俗を担当していました。その中で、今回、いくつか国立公園として、それから世界自然遺産登録のときに、環境文化という題目が出た際に、環境文化はやはり伝統行事等を通して、だんだん人と人の絆と言いますか関係性が薄れていく中で、環境文化がほとんど薄れていく感じを持っていました。その中で、世界遺産登録になってくると、今度は観光客の皆さまも、希少種や貴重種、そういったものが主にピンポイントで見られていって、題目であるはずの環境文化というのがだんだん遠ざかっていくような感じもしました。もっとやはり基本は人と人が結びついて、その中で生み出された環境文化ではないかと思っていますところ。こういった面をもっと復活と言いますか、取り上げていけたらと思っていますところ。よろしくお願いします。

岡：こんばんは。住用総合支所の岡と申します。自分自身は名瀬生まれの名瀬育ちなので、あまり環境文化というところには、子供のときから親しんでいるわけではありませんけれども、これから勉強させていただければと思っていますので、よろしくお願いします。

師玉：こんばんは。住用総合支所産業建設課の師玉です。今年度 4 月から産業振興係に配属になりまして、環境省や＜不明＞環境文化ということで打ち合わせをしていたところでした。聞き覚えがあると思っていて、今、報告書を見たら 2019 年度大和村であったものに参加してしまっていて、参加したくせに何もしていなかったことをこの場を借りてお詫びします。皆さんの意見をいろいろ聞い

て、住用総合戦略にしっかり生かせるようにしたいと思いますので、よろしくお願いします。

高梨：皆さん、こんにちは。遅刻してきて申し訳ありません。住用の皆さん本当にご無沙汰しています。私は久さんと同じで奄美博物館に以前勤務してまして、市町村合併をしてから、私は住用町担当で、住用町の全集落を回っていろいろなことを住用の先輩の皆さんから教えていただきました。退職したあと、鹿児島大学で環境文化教育プログラムが始まってまして、そこで今5年目ですけれども、ずっとプログラムの作成と講師を務めて、環境文化のことを続けてやっています。住用にお邪魔していたのもだいぶ昔になってしまいましたが、またお手伝いができることがありましたら、今回を機会として皆さんとお会いしたいと思っていますので、またいろいろ教えていただきたいと思います。よろしくお願いします。

師玉：住用地区の子供たちがそもそもフヤフヤ汁を知らないというところが一番あるのではないのでしょうか。

和田：お母さん方が作れません。

師玉：私は見里ですけれども、西仲間の人たちはもしかしたら知っているかもしれないけれども、それ以外、周りのほかの集落の子供、子育て世代、親は、多分知りません。

濱田：そういう意味では、地元の次の世代がいろいろ実感してもらうといい。

師玉：こういう料理があるよと。でも、郷土料理と言っても、多分鶏飯ぐらいしか思い浮かばないので、そうなると、住用らしさはないのだと個人的には思います。

山下：多分、フヤフヤは、おそらく住用全体としたら、西仲間と石原と役勝がやっているのではないのでしょうか。

和田：役勝は、講習をして、そのあとで習って、今、してるという感じです。

濱田：ちなみに時期的には大丈夫ですか。

山下：時期は12月は大丈夫です。12月の中旬からメスも下ります。

茂木：今月の29日が、旧暦9月9日になります。

山下：旧暦の9月9日です。

茂木：西仲間は、ご承知かもしれませんが、毎年川の入札を行っているので、本流の住用川が5番まで、いつの間にかダムがなくなって、1番、2番、3番が下に下っていた時期も何年かあったりもしましたが、集落総会の話し合いで元に戻しました。支流が五つぐらいありますので、大体10です。ですから、12月のその時期は、大丈夫だと思います。



茂木：モクズガニの川下りも順番がありまして、最初にオスのカニが下ってきます。次にメスが下ってきます。一番最後は障害のあるカニが下ってきます。それが来ると終わりです。旧正月ぐらいです。順番がありますね。

濱田：メスがおいしいのですか。

山下：メスはシキ（タマゴ）があっておいしいですね。

和田：フヤフヤを作るのには、メスとオスとを一緒にしないと、塊がうまくできないというふうに言われています。

濱田：既に座談会になっています。

和田：だから、メスもオスも必要です。

山下：オスが多いときには卵を混ぜるんですよ。

和田：そうです。

山下：そうしたら固まるのです。12月だったら、メスも下ってるのではないのでしょうか。大丈夫でしょう。最近発電所のダムの水が放水されて、なかなかカニも少なくなっていますけれども。

和田：集まった方々に、試食をしていただくのですか。

中島：そういう形にしたいです。

興津：ご相談したかったのは、カニがどれぐらい採れて、どれぐらいの量のフヤフヤを作れるかによって、調理した人だけが試食できる場合もあると思いますし、もしくは座談会に来ている方に配って食べながら座談会を聞くのもいいのかなと思っていました。

和田：松原昇司が支所長をしていたときに、地域文化のことについてのフォーラムがありました。そのときには、川内のほうでウナギが採れるので、ウナギのみそ炊きと、フヤフヤと、アユはここで捕獲できないので、本土のアユを塩焼きにしてあげた、会場にいらした方々に、全部試食していただきました。それが平成何年でしょうか。

師玉：平成27か28ぐらいですね。ショウジ兄が支所長をしていたときですね。

和田：松原昇司が支所長をしていたときです。

師玉：27 から 29 年ぐらいだと思います。

和田：平成です。

師玉：平成 28 かかもしれません。



和田：その頃に、環境文化的な話で、川に関するフォーラムでした。そのときには、リュウキュウアユの研究に携わっている住用小学校の子供たちがいたので、それから住用小学校の校長先生が体験談を話したりされました。そのときのように、そのためだったらみんなで声を掛けてカニを集めればできるでしょう。そのときもそういうふうになりました。それから、住用小学校の落成式か、何十周年かのときに。

山下：公民館でやった時ですね。

和田：重教頭先生がいらしたときに、フヤフヤをして、全部に配ったけれども、そのときは人数が多すぎて、住用だけのカニでは間に合わなくて、それから秋利神。

山下：徳之島の秋利神。

和田：徳之島の秋利神からもカニを取り寄せて、みんなでフヤフヤを作りました。

山下：すごいいっぱいだったんですよ。

和田：落成式か何かでした。

山下：公民館でやったから落成式だったか。

和田：公民館で何か。そういう何かのときに、フヤフヤをみんなに絶やさないように伝承していこうという形は今までもありました。

興津：それは、何人分ぐらい作ったか覚えてますか。

山下：PTA、教職員、一般の方々の参加だったから。

和田：小学校のときは、もう何百人だったと思います。

山下：250～300 人ぐらいだったと思います。

和田：そのときは、もう本当に足りなくて、秋利神からカニを取り寄せたりしましたが、この場合の、平成 29 年の頃のフォーラムのときはそんなには、でも、会場のいらした方には全員にお椀に入れて差し上げました。それは公民館の調理室で調理して出しました。

中島：どれぐらい作れそうなのか、どれぐらいの方に来ていただけそうなのかということですよ。

和田：会場の人数。

山下：ここで採る人はもう決まっていますから、先ほど茂木さんが言った入札がありまして、採る人は決まっています。

和田：ただ、そのときに、みんな採ったものをそのために何人分ぐらいということで集めました。人数が決まれば大体分かります。

山下：人数が決まればできます。

和田：入札した方々にお願いをして、生かしておいてもらいます。

山下：そこにマングローブパークがあります。その手前の橋の辺りに、ちょうど 12 月頃にメスが来てちょうどいいです。そこが一番採れるところです。茂木さんが専門です。

興津：採れそうなカニの量に合わせて人数を決めるよりかは、人数を決めてからのほうがいいですね。

山下：そのほうが早いです。

茂木：男が調理のことに口を出すのはあれだけど、本当にフヤフヤ汁を作るのでしたら、古式にのっとって、卵なんか一切使わないで、本当の昔のやり方で作ったほうがいいと思います。

山下：だけど、メスが多い方がよいと思います。

茂木：卵を使うのは最近のことです。もともとのフヤフヤは卵は全然使っていません。

X：卵というのは鶏卵です。

茂木：本来は鶏卵は使いません。

中島：もしできるのであればやりたいですね。

山下：アネク（蟹籠）を仕掛けたら、1 日で 100 個、200 個ぐらい入った時代がありました。それは昔、大先輩方が言っていました。

和田：アンピラにいっぱい取れました。

山下：今日は誰々、明日は誰々と当番を決めては、交代で 7 人ぐらいの人数で分けていました。

茂木：1 番が、ダムの水が一番減ると、最近ではダムは堰堤が高いじゃないですか。あちらから落ちてしまいます。

和田：人数を決めて、それに沿ってみんなに集めてもらいます。

山下：そういう感じです。

和田：そのほうがいいです。

中島：多めに作って、あとから来られた方も食べられるなら食べていただくとよい。

広野：1 点伺いたいんですけれども、フヤフヤ汁は 1 つの食文化で、料理を次の世代に受け継いでいける意義が一つあると思います。もう一つは、先ほど中島さんが言われた山と川と海とのつながりというところで、一つの料理からそういう自然全体を、住用の川と自然、人間との関わり、生活みたいなものが、何か導き出されて、午後の座談会のテーマにもそこからつながるとありがたいと思います。

久：先ほど話された、最初は何が下りてきて、次の段階は何が下りてきて、料理はオスとメスを入れるとか、そういった工夫とかも大事なのではないかと思います。

濱田：さりげなくこのお三方が口走っていること、それがもう、おー、えーと言いながら聞ける話です。こういうことが座談会で出てくるだけでもすごいです。

和田：フヤフヤのカニもそうですけれども、タナガ、テナガエビは欠かすことができません。でも、もう夏場は過ぎましたね。

茂木：夏場が旬ですから。

山下：10 月ぐらいまでです。

濱田：所長の山・川・海というそのつながりと、フヤフヤ汁の絡みで、何か一緒に意見交換できるテーマがないかということをおっしゃったと思います。名瀬の生まれ育ちで、私は先祖が住用にいないので、父が芦花部、母が大熊（だいくま）でした。そうすると、ほとんどの奄美大島の集落は、海を正面にした文化です。そうすると、住用で生まれ育った方々は川遊びが普通のように。川で夏場は遊ぶという意識はあまり私たちにはありません。全部が全部とは言いませんが、どちらかというと海です。そういう中でいうと、住用の環境は独特の文化だと感じます。子供たちが川遊びをしている写真とかを見ますが、ずいぶん昔の子供たちではなく、今でもぐらいな感じで川で遊ぶのが普通なのを見ると、大袈裟ですけれども、あり得ない風景がいまだに残っているのだなと思います。

濱田：そういうものにスポットを当てるといえるのか、山があって川があって、海に流れ込んでいたところにマングローブの原生林広がっているという独特の自然環境と文化が育まれているというのが、すごく注目すべき点だと思いますし、そこに世界自然遺産地域が隣接しているのは、いい縁だと思ったりします。一つ、世界自然遺産地域の件ですけれども、この座談会で、ぜひ、環境省のほうで、どれぐらいのものが出せるか分かりませんが、世界自然遺産地域のコアゾーンの線引きが、今、こうなっています、皆さんの集落はバッファゾーンでこうなっていますというのを、こういうところではっきり見られるようにすると、地域の人たちが、あの郷の、あのアンカタ（あっち側）じゃやとか、あっちからあっちじゃや、とか、また身近に世界自然遺産地域が感じられるポイントの一つになると思います。プラットフォームの場で、皆さんは世界遺産地域は大体この辺と言えますかと聞いたら、数人が集まっていたんですが、答えられない人がほとんどでした。住用の皆さんとも、先輩方も含めて一緒に話したときに、その場で世界自然遺産地域、世界遺産と言われても、私たちはどこからどうなっているかさっぱり分からない。いつの間にか何か世界自然遺産らしいよという話しかしてないよという会話が当たり前のようにありました。少しだけ、私の知っている範囲だけその場で、あの付近が線で、あそこから上流はこうなっているようですよと言うと、ああそうなんじゃみたいなことだったので、そういう意味でも世界自然遺産地域になっていますというのを、こういう場で地元の方々にはっきり見えるように環境省の方が説明して下さるといいのかなと、公式な呼び名の地名と、地元の人が言うところの方言の呼び名がそこで分かったりとか、何か出てくるのではないかという気もします。



高梨：先ほど広野所長がおっしゃった、フヤフヤを食べる意義、山、川、海のつながりというところで、先ほど茂木さんが言っていた旧暦の9月9日にカニの入札をするというのが、非常に貴重です。以前は川内川でもされていたそうですね。もう川内川では入札はなくなっていて、奄美大島でカニ漁で入札をしているのは西仲間だけです。入札をすること自体が資源管理となるわけです。ですから、カニ漁の入札があるというのは、皆さん入札で捉えたものを食べるということで、入札の日取りが旧暦の9月9日に当たり、本土で言えば重陽の節句ですけれども、島で言えば、ノロの祭祀日になります。祭日なので、その日に入札をすることは、おそらくもともとは何か意味があるのだと思いますが、そういうところからも、地域の文化へ、フヤフヤとカニ漁から広げていくことはできると思います。



広野：今で言う資源管理みたいな、そういう保全の仕組みとかを、独自でずっとやってこられたということですね。

高梨：そうです。久さんも何度も調査にも行かれています、入札の帳簿が残っています。

高梨：明治時代から記録に残っています。多分、それ以前から捕獲ルールみたいなものはあるでしょう。

和田：200 年以上とは言われています。

高梨：明治からは入札の帳簿が残っていました。

茂木：だから、明治維新で鹿児島県が管理するよりも以前から、あるわけです。50 年ぐらい前の話で、タケシマ（武島盛氏元区長）さんという方が、川に、今はもうそういうことはしないで籠で採りますけれども、昔は、ハジ、アネクハジということで、川に V の字の堰を作って、落ちアユ漁みたいな感じにして、そこに餌は入れないで、大きな、アネクと言いますが、竹の、日本語で言うと築みたいなの、直径が 60 センチぐらいあるような大きいのを作りました。普通の築は下に向けて餌が流れてそこに入りますけれども、下ってくるカニを採るために、上流に向かってして、上に向かってとるわけです。そこにウナギが入ったり、アユが入ったり、ツィクラ（ボラ）が入ったりということもありました。つい最近までやっていましたけれども、今、県もうるさく、作ってくれるなというふうな立場になっているのではないのでしょうか。

和田：これはリュウキュウアユが絶滅危惧種に指定されて、だから、1箇所は、もう最後に作られた方の写真が住用村史に載っていましたが、あれが最後です。

高梨：今、茂木さんは作れますか。

茂木：作れます。

高梨：私たちもその記録をとっていないので、記録がありません。この機会に作りますか。

濱田：作れるけれどもやっていないのですか。

和田：それは、

高梨：アネク？

和田：アネク。築。築漁で、周りをせき止めて、ちょっと道を作って、そこに入れられるように。

高梨：本当に独特ですよ。住用じゃないと。

茂木：コーガンは、いわゆるモクズガニですけれども、私は住用だけにいると思っていたら、日本全国にいるのですね。上海ガニとよく似ています。先ほどどなたかが、シイの実が山と川と海をつないでいるとおっしゃいましたけれども、シイの実がたくさんなるときは、カニが肥えると、太るといいます。で、下るのが遅いと言われます。だから 9 月 9 日から旧正月の少し前まで、入札の間も旧正月までということで、権利が旧暦の 9 月 9 日から旧正月までです。

興津：カニはシイの実を食べるわけではないのですか。

茂木：食べます。

興津：食べるから肥えるのですか。



茂木：食べるから肥えると言われています。だから、先ほども言ったように、オスの大きいのが下ってきて、資源管理というのがありましたけれども、甲羅の直径が 3 センチ以下は、私は全部逃がします。大きくなって帰っておいでといって逃がしますけれども、そうでないと、それまで採ってしまうと全然、まだそんなにおいしいくないです。そういうような感じで、最初にオス下ってきて、河口で多分メスが来るのを待っているのではないかと思います。最後に、戦いに敗れた落ち武者（脚やハサミが欠けている蟹）が、下って来ます。本当にそれはもう、ずっと見ているけれども、やはり間違いはないと思います。

和田：住用川を利用した生活というのは、昭和 50 年代まではリュウキュウアユもいましたし、それも勝手に採ってよかったので、だから、アユの採り方が、ほうぼうで投網をしたり、竹網をしたりとか、いろいろな方法で採ったりとか、夏場になるとほとんど暑いときは川は避暑地みたいなもので、そこに、タモを持って行って、サイチュというエビの小さいのを採ったりとか、それからテナガ採りに行ったり、子供たちはもう川で遊びながらアユを手づかみ漁をして採ったりとか、そういう日常、昭和 50 年ぐらいまでは、川と関わり合いながら、子供たちも休みの日にはほとんど川に入ってエビを採ったりアユを採ったりしていました。

茂木：一番アユを取ったのは、和田さんのご主人ですよ。（笑）

和田：だから、そういう、今、先生に言ったイブ漁も、川を上ってくる、それも。

和田：ノボリグチって、食前にそういうものを採って、いただいていた。それと、アユは特に産卵期になると卵を抱いているので、それを卵と白子と塩漬けにしておくと、夏の頃は本当に塩辛になっておいしい、おかゆさんと食べたらとてもおいしい料理です。私は徳之島出身の朝潮がうちにいらしたときに、それをお皿にいっぱい出したら怒られまして、こんなの京都で出したらほんの少しか何千円だよと、こんなに出すもんじゃないと、朝潮に怒られたことがあります。そういうふうにアユを塩焼きだけではなくて、卵も塩辛にして保存食としたりして、お客さんがいらしたときに、それを出すと。だから、本当に、私は住用に来てから、お客さんがあったときに、何か出す料理で困ったことがないというか、アユがあつたりタンガがあつたり、もうそれさえ出せばみんな喜んでいただくというふうなのがあって、だから食文化としてはとても恵まれていました。あとはキノコのマツタケを採って焼いて出したりとか、そういう山と関わりながらほとんど生活をして、それをお客さんに出して喜んでもらえるという、そういう生活が 50 年代ぐらいまではありました。リュウキュウアユがもう希少種で捕獲できなくなってからだんだん川との関わりが遠のいたかなという感じです。テナガエビは、もう夏はみんな自由に採りますので、禁漁区じゃないので、入札が過ぎているので、だから、テナガエビはもう自由に遊びがてらに子供たちは採って、それと一緒に涼みながら川に入ります。そういうふうな生活をしていた気がします。

茂木：住用川の、さっき島の言葉で濱田さんが言われましたが、海島とあげシマ（集落のことをシマという。以下同じ）と、方言で陸のことをあげ島と言いますけれども、海ジマというのは海に面している集落を言い、あげ島というのは、われわれみたいに海に面していない集落を言います。だから、海島の方は、海に面している場所の方は川のものにはあまり興味がありません。魚がたくさんいますから。

和田：海島の人は川のは臭いと言います。

濱田：そうそう。思い込みもあるけどね。

茂木：食べないですよ。

和田：ですよ。

高梨：よその人は食べないですよ。

茂木：だから、加計呂麻なんかにタナガを探りにいくとたくさんいるという話でした。宇検の河内川でもそうです。カニを食べるのは、石原と須古（宇検村の集落）ぐらいまでです。あとは海がありますから、私も宇検に週4日ぐらい通っていますけれども、そのようです。

濱田：あとは、川も当然あるけれども、海に面してたら川に入ということは山に入ることなので、イコール危ない場所に入っていくということ。

茂木：川は短いですよ。

和田：珍しいのが、わが家へ鹿児島大学にいらした岡野先生が学生を連れて、聞き書き調査を西仲間と龍郷の秋名を調査しましたけれども、やはり生活が全然違うとおっしゃって、住用、西仲間集落の生活状態と、龍郷・秋名集落の話をなさって、それを冊子にして岡野先生が出された経緯があります。そういうときに、昭和11年生から昭和5～6年生まれの方々から聞き書きをしていましたが、やはり川と多く関わり合いながら、生活をしていた事が分かりました。

濱田：タンギョのほうに川沿い、もう3年前か、環境省の方も一緒に市役所の方も一緒に川沿いに行きましたけれども、あの風景は、奄美で歩いてこんな川の風景が見られるのだと、俺に驚くというよりも、岩の風景とか川の風景そのものでも衝撃でした。聞いたら、住用の周辺の方々は、結構こうやってここに来て遊ぶよと。

島崎：私は今43歳ですけども、今、この先輩方が言われている遊びはひととおり父からたたきこまれて、もう、週末は大体タンギョの滝にいて、だから、もう生まれたときから、父親が林業をやっていたこともあって、山には常にいましたし、週末には川へ遊んでいて、父が素潜り漁師をやっていたので、プラス海のものもいただいてという生活が普通に感じていました。今、こうやって、久しぶりにこういう話を聞いたら、すごく懐かしく感じてきました。しかし、現在もまだタナガ採りだったり、いろいろ、タンギョの滝も今はもう月に2～3回しか行っていませんが、毎週行くぐらいでした。俺はクライミングとかもできる場所で、クライミングにはまっていた時期に結構行っ

ていたりとか、上のほうまで行くと岩の下にちょっとした鍾乳石があったり、見たことがない風景がまだあそこにあります。それから大正 8 年に造られた旧発電所とダムもうまいこと見られるようにしたら、もっと自然と文化を感じられる場所になるのではないのでしょうか。今もすごい生い茂っているので、つい 2 週間前に行きましたが、そのまま残されているのも魅力的で、あれをもう少し見せられるようなやり方をすると、今の発電所を見つつ、昔の発電所も見ながら感じられるものもあるのではないかと思います。今は食に重さがありますが、文化のほうで考えると、もともとあった流れからの今の発電所の流れというのもうまく見えるのではないかと思います。昔は、あそこは全然川でした。上からの碎石で、だいぶ陸になっているので、当初は岩がなかったりして、もう、はじめからずっと泳げていました。

茂木：ダムがだいぶ埋まっているかもしれない。豪雨災害やら何やらで。

高梨：広野所長か濱田さんが、川が大きいという話をしていましたが、内地からの観光で来られた皆さんにもインパクトがあるという点で言うと、住用川は大きくて、多分本土からいらっしゃった皆さんから見ると、普通の景色です。川が大きいので、当たり前に見えてしまいます。本土と同じ景色が住用にありますが、奄美群島の中では特殊で、住用でしか見られない景色なので、そこをしっかりと説明をしていく必要があって、本当に川が大きいのは住用だけで、奄美大島に住用以外に大きい川はありません。それがどうしてなのかが、大和村に住んでみたらやっといういろいろ分かったことがありました。新しくまた図面を作っていますので、それとかで皆さんに説明したら、多分ご理解いただけだと思います。川の特殊性、本土から来た人にとっては大きな川は普通にある景色ですけども、奄美群島の中ではあまりにも特殊な景色だということと、その川を、大きな川を利用してダムが作られて、これが奄美の近代の産業革命につながっていったということは、住用でしかないものということでしょう。その辺は、アピールポイントかなと思っています。

茂木：島崎さんがタンギョの話をしましたけれども、観光課長会議の中で、タンギョというのは滝のことだから、それは場所の名前を付けたほうがいいと、西仲間でもタンギョが二つあります。山間にもタンギョがありますから、地名を付けましょうと提案しましたが、なかなか行政は、地名の表記が＜不明＞。ですから、観光マップには神屋タンギョとなっています。西仲間にはタンギョが二つあります。

濱田：タンギョという名前そのままですか。

茂木：一つはイシタンギョと言います。

濱田：ああ、ありました。

茂木：小さな、1 回も水が切れたことがないタンギョです。山間は山間タンギョです。山間は、集落の奥の方にタンギョがあります。こういう場でも口が酸っぱくなるほど言ったほうがいいと思いました。タンギョはタンギョであって、神屋タンギョと言ったほうがいいと、そういうことを提唱して、認めてもらいますけれども、なかなか浸透しません。

濱田：茂木さんが言っている名前のことですが、こういう場で出ます。何となく引っ掛かる人は引っ掛かります。私も引っ掛かります。フナンギョの滝という言い方はおかしいと、誰かがフナンギ

ヨの滝とずっと言っていると気になって仕方がないものですから、申し訳ない、細かい話だけど、断りを入れて、滝、滝と言っているようなものだから、フナンギョのフナンギョと言ったほうがいいですよと、じゃあ、タンギョのほうがいいですかというから、タンギョのタンギョでいいと。今、三つあるというのは初めて自覚した状態でしたけれども、確かに地名に関してはことあるごとに言っておいたほうがいいのではないのでしょうか。

茂木：マテリアの滝とか言いますけれども、ミッション系みたいな名前にしているけれども、本当はマティダです。本当はマティダヌコモリです。ついでに、よその町村のことを言ってはいけませんが、龍郷の町の名前で秋名としていますけれども、本当はアギナです。濁ります。地元の方に聞くと、アギナと絶対に言います。それは、結局自分が役場にいてそんなことを言ってはいけなくても、県から毎年字名の調査が来て、そこにアキナとして回答してしまうからそうになってしまうのです。本当はそこで固有名詞だからアギナと貫けばよかったのです。瀬戸内町の阿木名と同じです。向こうはアギナなのに、こちらではアキナと言います。でも、シマの秋名・幾里集落の方は、全部アギナと言います。ですから、先ほどのマティダヌコモリも、マテリアという、ミッション系、カトリックみたいな名前で、そのほうが格好いいのですが、本当は太陽が上から照らすという意味です。

濱田：方言とか昔から地名はそのまま残したほうがいいですよ。

茂木：そう思います。

濱田：後ろに何かの文化が隠れていたり歴史があったりしますから。

茂木：だから、ルビを振ったり括弧書きを付ければよいと思います。

中島：確かにそうです。

濱田：ややこしい話ですけども、笠利の赤木名はアカキナではなくハッキナです。

茂木：地区名だって、集落名ではないです。

茂木：集落名ではありません。話がとりとめなくなりました。

広野：いろいろな要素がたくさん出ていますけれども、繰り返しますが、外から初めて奄美大島に来た人が住用の面白さを知りたいとか味わいたいといったときに、集落ごとに個性があるというか、そこにしかない何かがあったりとか、その一つが大きな川という話でした。また流域と考えたときに、大きな川ができるのは、もちろんそれだけ雨が降って、奥行きある流域があって、川が当然形成されるという話だと思いますけれども、世界遺産地域になっていたり、国立公園になった奥の森林や山と川がつながって、これだけ大きな川ができて、そこにしかないカニ漁が行われていると。そのようにいろいろつながって、そういうところが住用の個性、ほかにはない地域性ができている、そこがつながって初めて気づかされることもあるでしょう。おっしゃったように、ふと見れば何でもない普通の川かもしれませんが、地名や、カニが入札によってずっと引き継がれてきたとか、どういう関わりが今までなされてきて、こういう住用地区がほかにはない地域の面白さとしてあるので、

その辺りがもどかしいですけれども、座談会を通じてもっとクリアになって、皆さんから面白さをもっと伝えやすくすることになるといいなと聞いていて思いました。

茂木：座談会をやっているのと一緒にです。

中島：もう楽しみました。文化的なものはすごく大事です。少し話がずれますが、今の広野さんの話からすると、もう一回地図を見ようと思いますけれども、住用は世界遺産地域とより色濃くつながっていると言えるかもしれません。川を通じて、上流部の世界遺産の森と集落の文化がつながっていることが住用の文化を考えるうえで大きな部分を占めていそうです。例えば、世界遺産と近い集落とか、遺産の森とつながった地域とか、もしかするとそういう言葉が地域振興の時の売り文句になるのではないのでしょうか。言葉を洗練させてうまく言えば、ほかの地域と明確に区別できる考え方ではないかと思います。

広野：世界遺産センターでもそういうところを少しお伝えできると思います。

中島：こう言うと、ほかの地域の方が嫌がるかもしれません。ただ、ほかの地域にはまた違う良さがあって、住用は山や森との関係が少し奥深いという点ですが、少し森との関係が近いことが違うと。違うというよりも、他にいい表現があるかもしれません。

濱田：競争することはありませんが、おっしゃっているように、本当に私もそう感じます。偶然ですけれども、トンネルができて、トンネルを抜けたときに、どーんと、山の風景がフロントガラスにいっぱい来るのは、なかなかダイナミックで感動します。ああいうところにサイン計画で、これより住用という看板を作ったり、ここからは人は平気で山や集落の中にどんどん入ってけがをしては駄目ですみたいな雰囲気をつくって、例えば鳥居的なもの、違うゾーン・区域に入りますぐらいの演出をして、世界遺産地域と密接につながっているエリアに入りましたぐらいのことをやると、住用の特異性とか注目度が上がるのではないかと、ここ数年ずっと提案をしています。

中島：今、お話を伺って、そうやって見直すと確かにそうで、あの少し長いトンネルは確かにそういう役割を担っていて、心の変化を観光客にもたらすことができるのではないかと思います。

濱田：もちろん山越えは山越えの良さがあると思います。偶然ですけれども、トンネルが、絞り込んでからバーンと開く効果をもたらしているというのが、すごく面白いと思っています。

中島：<不明>ではそういう文化的なというか、地元の人々の生活とか、それをどうやって<不明>食べ物とか、<不明>すごく面白くて<不明>それがあまり、感覚的には世界遺産とつながった文化と言ってもいいかもしれないですけれども、それとは別にきちんと地域で若い人たちにつながるようなことがいいなと思います。

濱田：ワークショップでは、こういう中身の濃い感じは出てきません。絶対に出ません。これは濱田が言ったとはどこにも言わないでほしいのですが、ワークショップはあまり効果がないと思っています。結果、どこか腑に落ちない結論で、何らかの結論を出すためのワークみたいところに陥ってしまうので、それよりは、こういう座談会で議長なり主幹でこれを開いてくださった環境省の皆さんとか、奄美市の皆さんが、取りまとめてこんな感じでどうでしょうかみたいなのをするのが、

一番生々しい声とか今の話が広がっていく中で、地元の方から生々しい面白い話がたくさん聞けるので、こういうのを記録して、住用史ではないですけども、集落史とかにどんどん積み重ねていけば、一枚一枚重なっていくのだらうという感じがします。

和田：私は住用川という、今、川を中心に話が続いていますけれども、支流が住用川にそそいでいるところがあって、特に私が一番好きなのは石屋川という発電所からダム線に入るところの途中に滝があったり、そこから飲料水をずっと引いていますので、だから、そういう奥深い沢から住用川に流れていたりとか、冷川、三太郎峠のずっと上のほうまで行っています。だから、そういうところの、向こうは農業用水あるいはマングローブのほうに水を引いているところがありますけれども、そういうふうに生活に密着して利用している川もあるということも、やはり住用川の支流にも目を向けるのはどうか、と思います。

広野：座談会みたいで発言だけを聞いていてもすごく面白いのですが、位置をちょっと地図みたいなものに落とし込んだほうがいいのではないのでしょうか。

中島：それはその場でやるということですか。

広野：その場では難しいかもしれませんが、先にお話いただいた場所を絵的にといいますか、外部の方に面白さを伝えるときの地図につながるような、要素を地図に落としていく、本流があって、支流があって、遺産地域にもつながっているというようなイメージです。

中島：いいアイデアにつながるような気がします。濱田さんが川と世界遺産地域の関係を分かるようにしたらという話をされました。時間が多少かかるけれども大きな地図が準備できれば、例えば座談会のときでも、地図の中に、今、ここの話ですということを示したら、地元の若い子たちとか、分からない子たちが、ここの話なんだと思うかもしれません。それで、もし地図で示せれば、子供たちの見方が、もしかしたら師玉さん世代もかもしれませんけれども、イメージがより分かりやすい。その成果を報告書に入れて、多めに刷って、報告書でなくても冊子でもいいですけども、そうするのは形として残していくというのはできるかもしれません。

濱田：大きければ大きいほど実感は湧きます。

中島：大きい地図がいいですね。

濱田：みんなでわいわいやりながらでもいいですね。

中島：座談会だけでも、少し変わった座談会でも全然いいと思います。自由にやったらいいと思います。

濱田：鹿児島大学の昔の、水車のあった場所とか、調べてプロットしたのがあります。水車がここにあったはずというプロットも、今、出てきた地図上に、昔ここに水車があったのよというのを配置すると、ぱっと出た思い付きだけれども、そういうのも入れたら面白いかなと思いました。

和田：87 カ所の水車があったと言われていますが、実際は 78 カ所しか場所が分からなかったと調

査では言われています。ですから、住用と石原地域にも水車があって、普通の地域では牛や馬を使って車を回していたけれども、住用の場合には水車を利用した製糖工場だったというふうに、やはり川と関わり合いながらしたというのと、木材とかそういうのも、川に流れて。

濱田：皆さんは水車を見たことがありますか。

茂木：われわれのときはもうないね。そこにあった。

山下：その高速道ですね。

和田：郵便局の後ろにあったのは、岸本文代ちゃんが入学式の日水車に火事になったという記事を書きました。火事になってその水車が駄目になったんだというのが分かります。

茂木：昭和 23 年生まれの方ですから、7 歳といたら昭和 30 年のとき。

和田：そこまで水車が稼働していたと思います。入学式のときに、火事があったと騒動したと、住用小学校の、郵便局の後ろと言いますね。

山下：支所の裏側でしょう。

茂木：吉村盛彦さん（故人）の家の横でしょう。

和田：上のほうには、昔の冷川から水を引いた水路があります。

濱田：先ほどの川の話ではないけれども、内地の人が水車を見てもそんなに珍しくないのかもしれないけれども、大きい川の話ではないけれども、奄美で水車を使ってそれを生活の中の一部として取り入れてやっていた文化というのは、おそらく住用だけかな。

高梨：奄美大島は水車があります。

濱田：あるんですか。

和田：大和村も水が

高梨：大和村ありません。

興津：水車は発電用の水車ですか。何をする水車ですか。

高梨：製糖用です。

和田：製糖用の水車です。

広野：サトウキビを使っていた製糖ですね。

和田：国立国会図書館に神屋、今の上田のほうの写真がありますけれども、そこにも水車に見えるものが写っています。ですから、そのほとんどが田んぼだったところが、もうサトウキビ畑に切り替えられていく風景がその写真には見ることができます。

広野：ダムができる前の時代の話ですね。

和田：そうです。ダムは大正 8 年でしたが、そのときにも、私の聞いた話では、伝馬船とかそういうので、資材を上運んだというふうに聞きました。そのときには、水が豊富で、やはり船も行き来ができたと聞きました。

X：伝馬船というのは、発電所の近くまで行けたということですか。

和田：そうです。資材を運んでいたそうです。

山下：船で行けたという話は聞いたことがあります。

茂木：私の祖父は龍郷から来ましたが、伝馬船で石原の一番先に製材所がありまして、そこで樽用の木、沖縄で使う砂糖樽の木を製材して、それを運ぶ仕事をしていたらしいです。伝馬船に満載に積んで、向いは山間のモチヨリ（大字山間の字名「持寄」）という今、港があるところで、戸玉のほうに毎日運んでいたという話です。私はその祖父の顔も知りません。生まれる前に死んだそうです。

和田：木材運搬とか、それから発電所の機材を運ぶのも伝馬船でしたと聞きました。水が豊富だったので、昭和 4 年生まれから聞いた話では、柳橋から水が豊富だったからみんな飛び込んで泳いでいたという話を聞きました。相当水が多かったと聞きました。

茂木：いろいろな話が出ていますが、行事は稲作文化に由来するものがほとんどです。豊年行事とか唄とか、行事だけが残って稲作が消えている。国民文化祭や奄美市の文化祭とかこの前もやりましたが、継承の難しさはそういうところにあります。唄や踊りがあって、稲作がなくなって、それに由来する行事たちが細々と息も絶え絶えながらという。

高梨：公民館があったところは池でしたよね。

茂木：そうです。

高梨：そこに悪綱を投げた。

茂木：最初は池に投げました。今は川に投げます。

高梨：池ではなくて、住用川ということですよ。

茂木：（住用川は）暴れ川でしたから。

高梨：三日月湖がたくさんあるじゃないですか、マングローブにも。

茂木：だから、豪雨災害のときに本流がもとかえった。この川はものすごい暴れていますから。

高梨：それも川とのつながりですね。

中島：水量が多くて、急に広がっている地形ですよ。

茂木：マングローブパークのカヌー乗り場があるじゃないですか。あれをフルカワと、われわれはフルコと呼んでいます。もともとはあちらが川です。こちら、左側は新しい川です。おそらく昔はあそこを通っていたと私は思います。役場の前を通って、公民館が池でしたから、そうしたらもう一つ池があったんです。今池もなくなっていますが、今、それが大川です。先ほどから地名にこだわっていますけれども、住用川はあくまでも地図上の呼び方であって、われわれがシマでは住用川とは絶対に呼びません。ウーコです。大きな川です。ウーコと言います。オッコとかウーコと言います。集落では言います。住用川は地図上の名前であって、資料にはそのまま名前が付いていますけれども、冷川というのも実は地図上の名前であって、われわれは冷川とは言いません。これは用水路のための川だったからわれわれの中ではユギダコと言います。ユギタというのが用水なんです。

濱田：知りませんでした。

茂木：それが残っていた川内はまだユギダコなのです。そういう言葉にしても、環境文化とおっしゃいますけど、それが全部つながった中での環境文化ではないかと私は思っています。手前みそになりますけれども、いつも実践者でありたいと思っているものですから、高梨先生に、昔、偉そうなことを言いましたけれども、いつも実践者でありたいとは思っています。

濱田：地名の話とか方言でいう呼び名の話とかは面白いと思いますし、次の世代がそういうことを知ると、自分も含めてだけれども、また愛着が湧いたり、なぜこういう呼び名なのかとか、そこから発想も出ます。少し前に戻りますが、カニ漁の話で、入札自体が旧暦 9 月 9 日に始まって、旧正月の頃までやると言っていました。一つ、旧暦というのをキーワードにおいて、年間を捉えるというのを、何かテーマに置いておくと、島の文化とか、行事とか、神事とか、そういうのが連続的に旧暦にのっかっていろいろなものがつながっていくというのが、あるいはこのカニ漁に関しても、神事ではありませんが、＜不明＞だからこうなっているのだと、そういうことが分かってくと、今、茂木さんが言った本物にのっかって実践者でありたいみたいなことをおっしゃったけれども、何で本当のことをやっていきたいかというのは、旧暦の 1 年の流れを受け継いでいた集落の文化とか歴史を知ると、これは確かに旧暦でやったほうが意味があるというのもすごくつながるのではないかという気がします。

茂木：その辺りは博物館の元館長、久さんや高梨さんたちがつくられた旧暦カレンダーが素晴らしいでしょう。私も子供にも送ったり、自分でも持っていますけれども、毎年買っています。あれは本当に素晴らしい実践だと思います。一番西仲間に取材に来てくれたのは、久元館長です。

濱田：旧暦はやはり大事です。ほかの場でも私は言いますが、旧暦をキーワードにいろいろ発想すると、奄美はいろいろほかにもあるし、旧暦に合わせて来島をすると面白いよという感じで言ったりもするし、旧暦を何かのキーワードに置いておくと子供たちにも旧暦の意味、お盆がなぜこうなっているかとか。

茂木：お盆が三つあるかとか。

濱田：そういうことに全部意味があるということが全部つながっていきます。

茂木：ユリヅキ・ユリドシだから。

濱田：実際に、暑い寒いという気候も旧暦を見たら、まだ夏じゃがと、まだ冬じゃがとか、今年は6月が2回ありました。

和田：閏月だから。

茂木：ユンヂチだから。

濱田：旧暦の6月は2回ありました。だから、暑さがまだ続いているということも、納得でした。

茂木：島のことわざにもいろいろなことが確かに残っています。大根の七夕巻きは旧暦の七夕に播きなさいと言ったり、シマの人が残したことわざの中にいろいろな宝石みたいにちりばめられている気がします。

中島：＜不明＞環境文化＜不明＞

久：付け加えれば、自然の流れを考えると、旧暦で考えたほうが理解しやすいと思います。

茂木：イジュもきちんと梅雨時を教えてください。イジュの花が咲くときに梅雨が始まります。そちらのほうが正しいかもしれません。

山下：カニのフヤフヤは、10時か11時と書いてありますが、だいぶ時間がかかると思います。

興津：早くからの方が・・・

中島：フヤフヤのところはどういうやり方にしたらいいでしょうか。料理教室ではないけれども、一緒に作るみたいな感じで。石臼持たれている方がいるとしたら、それを挽いてもらうのであれば子供が参加しやすい。

山下：カニの甲羅をはずして、つぶしてエキスを取る作業をする。

中島：前日からやる必要があるんですね。

和田：時間が1時間とか2時間ではできません。

山下：前日からしないとできないと思います。

和田：私たちがしたときには、午前中……

山下：エキスを作っておいて、それを煮てするのだったらできるかもしれない。

和田：サン奄美でしたときは、そのまま石臼を持って行って、石臼でしたら時間が早いです。ミキサーでしたらもう時間が足りません。

濱田：テレビの料理番組でやる、これを30分煮込みますと言って、煮込んだのが出てくるのはどうですか。目の前で作り方は見てもらって、端折るところは端折るのはどうでしょうか。体験となると、すごい。

中島：おっしゃるとおりで、それも一つの手だと思います。駄目であれば、そうするしかないですし、あとは趣旨をどこに置くかということです。できないものはできないですけども、少し参加してもらおうとか。そういう可能性はありますか。できそうなものですか。

和田：私たちがしたときには、3時間ぐらいかかりました。ツメを外したりとか、石臼で突きます。やはりミキサーでするのは時間がかかるので、石臼のほうがいいです。

濱田：無責任なことを言っていますけれども、作り方は分かりませんし、作る難儀が分からないので、ちょっと大変だ、無理というのであれば、今のうちに言ってください。

和田：スープだけ作って冷蔵庫に入れておいて、そして、そのスープを今度炊いていくのは、みんなでもいいかなと思います。スープから当日作るのは難しいでしょう。

興津：スープは何かで出汁をとるのですか。

和田：スープはカニをつぶして、こして、きれいにすぐ炊けるように準備しておいて、それを鍋で炊きます。ちょっとまた煮詰めます。

茂木：話が盛り上がって、明日も集まるにしても、終わらない。

興津：カニの調理の件と、カニをどういうふうに提供していただけるかのところを、和田さん、山下さん、茂木さんにあらためてご相談させていただきたいです。

茂木：入札ですな。

興津：そうです。29日以降に、入札の結果が出てからご連絡します。

山下：私は地区外ですので、入札には参加できません。

茂木：西仲間在住。

茂木：ほとんど新規の入札の人はいなくなりました。区長さんがどんどん煽り立てて、いっぱいマイク放送してみんな入札があるから、集落に落札金を入れるから。集落としては儲かりますけど、昔はもう 10 万とか、多いときは全部で 20 万とかの金額がありましたが、今はもう 2 万 5,000 とか 3 万ぐらいでもう少なくなりました。集落の資金としては、たくさんの方が入札に入ったほうがいいです。われわれだけでは少ないですから。

X：このフヤフヤ汁の体験といいますか、作るあれを公民館の講座で 12 月とか 1 月とか限定でやるとか、そうしたら、こちらも頑張りがいがあるのかなと。かつては名瀬の飲食店にも出した時期があると聞いたりしてて、社交業組合とかは、料理屋さんの講習を住用でやるとか、今回の件とは関係ありませんが、のちのちそういうことをするとか、広げる意味でいいのではないのでしょうか。

和田：広げても、その材料がその地域で採れるかどうかというのが問題で、大きい川でないとあまり肥えたカニはないので、住用川のダムからのカニ、役勝川のカニは肥えてるのが違います。やはり住用川のほうが肥えていて、大きさも違います。

茂木：宇検のカニを見ましたけれども、小さいです。川が短いからなのか。やはり距離が長いと大きくなると思います。ここで産卵して上って行って、上り下りを何回もして大きくなります。

和田：やはりダムのほうが栄養になる。ダムから下ってくるカニは大きいです。

X：飲食店までは話を広げすぎましたけれども、公民館の講座ぐらいはできるのではないのでしょうか。

興津：もう遅い時間になってしまいましたので、いったん、今日はありがとうございました。本当に面白いお話をいろいろ聞かせていただいてありがとうございました。私の知識不足であまり文化のことを知らなかったのですが、今日、お話を聞いて、やっと自分たちのやっていることのイメージが具体的にできるようになって、本当に参考になりましたし、座談会が楽しみになりました。

X：住用川と言わないようにします。

X：ウーコ。

中島：タイトルも、森とウーコの環境文化。

和田：入札のときは大川といいます。住用川は大きい川と書いて、大川 1 番、2 番、3 番、＜不明＞まで 5 あります。

茂木：支流のほうが名前が付いています。目の前にある川が一番大きい川ですからウーコなんです。

X：大川は大きい川ですか。

和田：大きい川です。

X：オオコでいいですか。

茂木：ウーコです。ウフコでもいいです。名瀬から先は・・・

茂木：アハキナと言いますけれども、われわれとしては、赤木名をアハキナと言いたいけれども、向こうはもうアが最初に抜けるから、ハッキナになってしまう。方言もそうです。われわれも三太郎峠で言葉が違います。

興津：では、本日はありがとうございました。



発行年月 2026 年 3 月

編集・発行 鹿児島大学鹿児島環境学研究会

〒890-8580 鹿児島市郡元 1-21-24
TEL 099-285-3229 FAX 099-285-7037